

令和 7 年 度

十勝農業試験場年報

—2025—

令和 8 年 7 月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構

農業研究本部十勝農業試験場

目 次

A	概 要	
1.	沿 革	1
2.	立 地	2
3.	機 構	2
4.	職 員	3
5.	施設および備品	5
6.	予 算	6
7.	試験ほ場	7
8.	施設等配置図	8
B	作 況	
1.	気象の概要	9
2.	当場の作況	1 2
C	試験研究および地域支援活動の概要	
1.	豆類畑作グループ	1 8
2.	農業システムグループ	1 9
3.	生産技術グループ	2 0
D	試験研究および地域支援活動の課題名	
1.	豆類畑作グループ	2 3
2.	農業システムグループ	2 6
3.	生産技術グループ	2 7
E	試験研究成果の公表	
1.	技術普及に移された成果	3 1
2.	論文、資料および刊行物	3 1
F	研修および技術支援	
1.	研修生の受入れ	3 4
2.	技術支援	3 4
3.	参観・視察者対応	3 7
G	広報活動、研究企画、場運営等	
1.	広報活動	3 8
2.	研究企画・場運営	3 8
3.	自己点検への対応	4 2

A 概 要

1. 沿 革

当場は、明治 28 年、河西郡下帯広村（現帯広市）に十勝農事試作場として開設され、畑作物の試作試験を行ったのが始まりである。翌年（明治 29 年）には水稻の試験圃、果樹園の設置が行われた。

明治 34 年、北海道庁地方農事試験場十勝分場と改称、明治 40 年河西郡幸震村（現帯広市大正町）に高丘地試験地が設置された。さらに、明治 43 年第 1 期北海道拓殖計画により農事試験機関の統一が行われ、北海道農事試験場十勝支場に改称し、その後も幾多の変遷を経ながら、十勝独自の自然条件に適應する畑作、稲作、さらに経営方式の試験研究に努め、農業の進展、管内の開発と歩みをともにした。

昭和 25 年、農業試験研究機関の整備統合により、従来の試験機関が国立と道立に 2 分され、当場は道費支弁の北海道立農業試験場十勝支場となり、同時に高丘地試験地は十勝支場分室となったが、分室は昭和 28 年、大正火山灰研究室となり、国立農試に移管された。

さらに、昭和 28 年より北海道の施設として農業試験機関の整備拡充が計画され、当場もその計画の一環として移転拡充を行うこととなり、昭和 33 年より河西郡芽室町への移転に着手し、昭和 34 年 10 月には現庁舎が完成、翌 35 年から畑作関係の試験業務は芽室に移して実施し、昭和 36 年には低温恒温室、温室、水稻試験地施設も完成して移転と整備はすべて完了した。

昭和 39 年 11 月、本道の農畜一体となった試験研究を行うための機構改革が実施され、当場は北海道立十勝農業試験場と改称された。

この間、昭和 31 年に農林省の全額助成による豆類育種指定試験地、昭和 36 年には豆類第 2 育種指定試験地、昭和 38 年にはとうもろこし育種指定試験地が設置されたが、豆類第 2 育種指定試験地は廃止され、豆類第 1 科に吸収された。

昭和 43 年には地力保全基本調査が開始され、昭和 48 年には小豆育種指定試験地が設置された。また、技術普及のため、昭和 26 年から専門技術員が駐在していたが、昭和 44 年に専門技術員室を設け、以後配置数が徐々に増加した。

さらに、昭和 59 年 8 月には経営試験研究体制の再編整備に伴い、経営科が新設され、昭和 62 年 4 月には園芸作物部門強化に伴い、作物科が畑作園芸科と改称された。

昭和 61 年には、農（畜）試整備計画により庁舎が増築され、共同実験室及び研究室、会議室が拡充された。

平成 4 年、道立農業試験場の研究基本計画に基づく再編整備により研究部長が置かれ、畑作園芸科が廃止されるとともに、作物科と園芸科が独立の科として新設され、てん菜科はてん菜特産作物科、病虫予察科は病虫科と改称された。

平成 6 年には、そうか病総合プロジェクトチームが設置され、病虫科、作物科及び土壌肥料科の研究員が担当することとなった。

平成 7 年（1995）は、明治 28 年（1895）に十勝農事試作場が開設されてから 100 年にあたり、十勝農業試験場 100 周年記念の事業を行った。

平成 12 年には道立農試組織再編に伴い、作物研究部、生産研究部及び技術普及部、総務課の 3 部 1 課編成となった。うち、作物研究部は、大豆科、小豆菜豆科、てん菜畑作園芸科、管理科の 4 科、生産研究部は栽培システム科、栽培環境科、病虫科、経営科の 4 科構成となり、専門技術員室は技術普及部に名称変更となった。また、実証事業を中心とする課題を立ち上げ、技術普及部次長をチーフとし、研究員と専門技術員をスタッフとする技術体系化チームで対応することとした。

平成 18 年には道立農業試験場研究基本計画ならびに普及事業見直しの基本方向に基づく組織再編により、てん菜畑作園芸科は畑作園芸科と改称された。また、専門技術員機能は普及センターにおいても担うこととなり、技術普及部は部長、次長、主任普及指導員及び主査（地域支援）4 名の体制として組織再編された。

平成 22 年 4 月 1 日に、地方独立行政法人北海道立総合研究機構が設立され、当場は農業研究本部十勝農業試験場として再出発した。研究部は豆類グループ（研究支援を含む）、生産システムグループ、生産環境グループ、地域技術グループの部門を横断する研究に対応する 4 グループ体制に再編成された。また、3 名の普及職員が北海道農政部技術普及課の所属として当場（技術普及室）に駐在し、地域技術グループとともに、普及事業との連携、地域課題の解決に当たることとした。

平成 29 年には、生産システムグループに主査（スマート農業）及び研究員 1 名が配置され、ICT を活用した農業技術の開発推進を担うこととなった。

平成 30 年には、豆類グループが大豆グループ（研究支援を含む）と小豆菜豆グループに分割、拡充された。

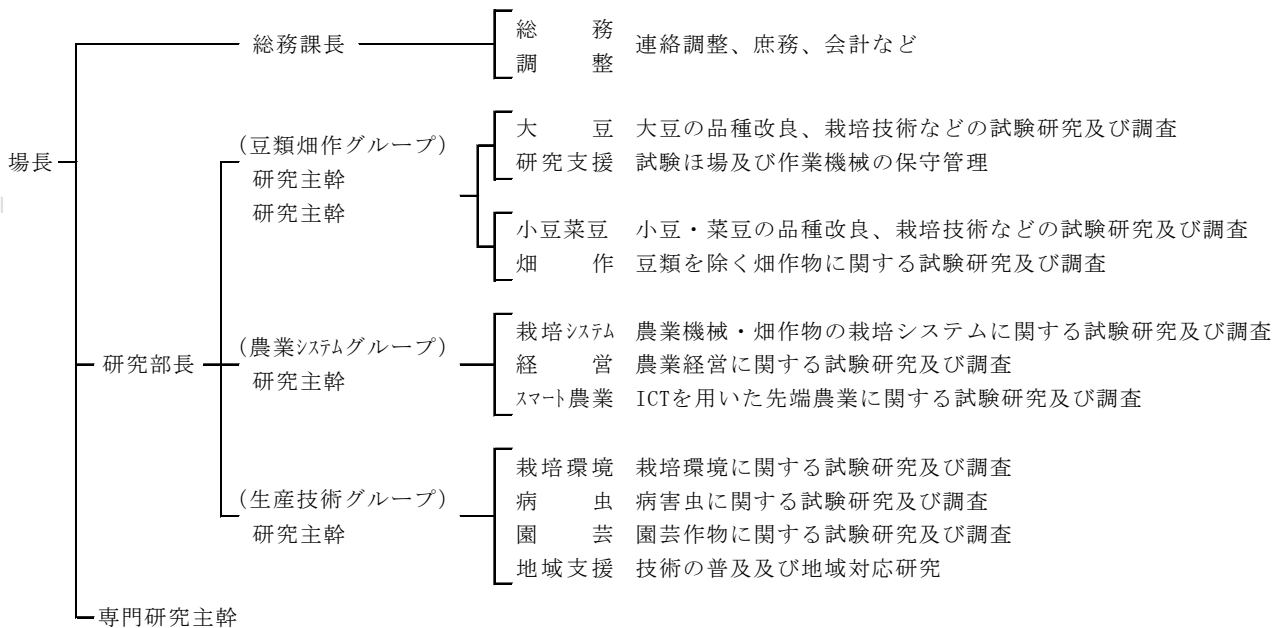
令和2年には、研究管理業務の効率化を図るため、大豆グループと小豆菜豆グループが再び統合され、さらに地域技術グループの畑作部門が加わって豆類畑作グループ（2研究主幹）となった。一方、生産環境グループと地域技術グループの園芸部門・地域支援部門が統合され、生産技術グループとなった。また、生産システムグループは農業システムグループに改称され、3グループ・4研究主幹体制に再編成された。

2. 立 地

1) 位 置

庁舎及び試験ほ場は河西郡芽室町新生にあり、J R北海道根室本線芽室駅から南東へ約5km、帯広市の西方約16kmの距離にある（東経143度31分、北緯42度53分、海拔98m）。

3. 機 構



（十勝農業試験場技術普及室）

上席普及指導員 — 主任普及指導員 — 主査（普及指導）

※所属は北海道農政部生産振興局技術普及課（十勝農業試験場駐在）

2) 土 壤

土壌は伏古統に属し、礫、砂層及び凝灰質堆積物の上に旭岳、雌阿寒岳、十勝岳B、十勝岳Cの火山噴火物が降下堆積した砂壤土である。

3) 敷地面積

区 分	面 積 (㎡)
総 面 積	780,099
(建物敷地)	(95,175)
(防風林)	(113,146)
(原生林)	(19,454)
(幹線道路)	(16,688)
(試験圃場)	(535,636)

4. 職 員

1) 現在員

(令和8年3月31日現在)

職 名	氏 名	職 名	氏 名
場 長	相 馬 潤	＜農業システムグループ＞	
専 門 研 究 主 幹	田中 義則	研 究 主 幹	原 圭 祐
＜総務課＞		主査（栽培システム）	吉田 邦彦
総 務 課 長	駒 井 敦	主 査 （ 経 営 ）	渡辺 康平
主 査 （ 総 務 ）	成田 信幸	研 究 職 員	蜂屋 瑞貴
主 査 （ 調 整 ）	－	研 究 職 員	後藤 寛満
専 門 主 任	石山 友広	研 究 職 員	大畑 美結
技 師	猪股 大翔	主任主査（スマート農業）	関口 建二
技 師	三浦 風香	研 究 主 任	木村 智之
＜研究部＞			
研 究 部 長	安岡 眞二	＜生産技術グループ＞	
＜豆類畑作グループ＞		研 究 主 幹	酒 井 治
研 究 主 幹	奥山 昌隆	主 査 （栽培環境）	石 倉 究
主 査 （ 大 豆 ）	鈴木 千賀	研 究 職 員	坂本樹一朗
研 究 主 任	萩原 誠司	研 究 職 員	池本 秀樹
研 究 主 任	足利 奈奈	主 査 （ 病 虫 ）	東岱 孝司
研 究 職 員	五十嵐秀成	研 究 主 査	白井 佳代
専 門 主 任	木村 裕之	研 究 主 任	丸山麻理弥
主 任	坂野 良樹	研 究 主 任	村田 暢明
主 任	安達 祐平	シニアアドバイザー兼主査（園芸）	鳥越 昌隆
技 師	杉村 海飛	研 究 職 員	阿部 純也
研 究 主 幹	藤田 涼平	主 査 （地域支援）	田澤 暁子
主 査 （小豆菜豆）	堀内 優貴		
研 究 主 任	佐藤 博一		
研 究 主 任	長澤 秀高	＜技術普及室＞	
研 究 職 員	島田 翔太	上 席 普 及 指 導 員	高橋 雅人
主 査 （ 畑 作 ）	来嶋 正朋	主 任 普 及 指 導 員	斉藤 克史
研 究 主 査	青 山 聡	主 査 （普及指導）	清水 理沙

※ 総務課職員は、北海道総合政策部次世代社会戦略局科学技術振興課から派遣。

※ 技術普及室職員の所属は、北海道農政部生産振興局技術普及課（十勝農業試験場駐在）。

2) 転入、採用、昇格者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
専門研究主幹	田中 義則	R7. 4. 1	中央農業試験場から
研究主幹	藤田 涼平	R7. 4. 1	上川農業試験場から
研究主幹	原 圭祐	R7. 4. 1	中央農業試験場から
シニアアドバイザー兼 主査（園芸）	鳥越 昌隆	R7. 4. 1	北見農業試験場から
研究主任	木村 智之	R7. 4. 1	農業システム研究職員から
研究主任	阿部 純也	R7. 4. 1	花・野菜技術センターから
研究職員	後藤 寛満	R7. 4. 1	酪農試験場から
専門主任	石山 友広	R7. 4. 1	オホーツク総合振興局から
主任	坂野 良樹	R7. 4. 1	新規採用
研究職員	蜂屋 瑞貴	R7. 4. 1	新規採用

3) 転出者等

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
研究主幹	大波 正寿	R7. 3. 31	中央農業試験場へ
研究主幹	平石 学	R7. 3. 31	中央農業試験場へ
主査（園芸）	坂口 雅己	R7. 3. 31	酪農試験場へ
専門主任	高橋 英樹	R7. 3. 31	退職
研究主任	奥村 理	R7. 3. 31	退職
シニアアドバイザー	江部 成彦	R7. 3. 31	退職

4) 契約職員

種 別	配 置	雇用期間					
		4～3月	4～12月	4～6月	4～5月	5～3月	5～12月
事務補助	総務課	1人					
事務補助	研究支援					1人	
研究補助	各グループ	5人	7人			1人	2人
季節農作業補助	研究支援						9人
季節農業技能員	研究支援		3人				

種 別	配 置	雇用期間					
		9～2月	10～1月	11～3月	11～2月	12～3月	1～3月
事務補助	総務課						
事務補助	研究支援						
研究補助	各グループ			1人		1人	7人
季節農作業補助	研究支援						
季節農業技能員	研究支援						

※パートタイム勤務

5. 施設および備品

1) 今年度設置・改修・整備・廃止した施設等

(単位：円)

施設の名称	事業内容	事業量	金 額
[整備] 防風林植栽工事	防風林植栽 780本	一式	657,228
[改修] 空調設備新設工事	庁舎内9部屋新設	一式	4,103,000
[整備] 庁舎暖房ボイラー(No1、No2)真空部品交換等工事	部品交換	一式	1,083,500
[整備] 構内木製電柱撤去・配線変更工事	木柱撤去、コンクリート柱移設	一式	2,211,000
[改修] 庁舎ほかキュービクル改修工事	アース改善	一式	40,700,000
[整備] 豆類低温育種実験室水抜栓修繕工事	部品交換	一式	594,000
[整備] 豆類低温育種実験室ブラインクーラー部品交換工事	部品交換	一式	701,800
[改修] 豆類特性検定温室網戸設置工事	網戸新設	一式	679,800

2) 新たに購入した主な備品

(単位：円)

品 名	規 格	数 量	金 額
カラープリンター	RICOH P C6000L 550枚増設トレイC6000込	1台	113,300
F F ストーブ	コロナ FF-VT5524P	2台	304,040
F F ストーブ	コロナ FF-74J	1台	195,800
エンジンポンプ	(株) 工進 SEH-50V	1個	106,712
デスクトップPC	Dell Pro Slim QCS1250	16台	2,976,600
パイオクリーンベンチ	株式会社日立産機システム PCV-1607BNG	1台	1,958,000
ノートPC	Dynabook GA83/XY A6A1XYF8U1HA	1台	274,780
ワイレー式粉碎機	株式会社入江商会 WM-3	1台	1,128,600
トラクター	キセキ TJW1233JSCPN1B	1台	13,860,000
乗用草刈機	キャニコム フルーティまさお	1台	1,185,800
ノートPC	Dynabook GA83/XY A6A1CYL821HA	2台	403,216
ノートPC	HP 250R G9	3台	494,340
でんぶん価測定装置	旭川計量機株式会社 R-2000	1台	897,600
デスクトップPC	THIRDWAVE AM-P7X56B-01B	1台	324,038
自動紙折り機	ドレスイン MA150	1台	165,336
マルチスペクトルカメラ搭載回転翼型無人航空機	DJI DJI Mavic 3 Multispectral (Mavic 3M)	1式	637,670
オープンシューズボックス	三島精器 BS-LL30H6N	1台	198,000
赤外線サーモグラフィ	FLIR C5	1台	148,500
アルコール検知器	SANKO ST-3000	4台	980,100
粒剤散布装置	DJI T25	1台	151,800
冷蔵庫	日立 315L 3ドア RV32X	1台	154,000

6. 予 算

1) 収 入

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決算額	増 減
技術普及指導手数料	0	19,000	36,380	17,380
農産物売払収入	1,334,000	1,334,000	779,631	▲ 554,369
法人財産使用料等	200,000	314,000	404,140	90,140
その他雑収入	0	114,000	114,000	0
共同研究費負担金	0	1,300,000	1,300,000	0
国庫受託研究収入	3,630,000	3,450,000	3,450,000	0
道受託研究収入	5,097,000	5,679,000	5,678,939	▲ 61
その他受託研究収入	59,539,000	91,734,000	91,734,000	0
道補助金	0	40,700,000	40,700,000	0
科学研究費補助金収入	0	380,000	494,000	114,000
合 計	69,800,000	145,024,000	144,691,090	▲ 332,910

2) 支 出

(単位：円)

科 目	当初予算額	最終予算額	決算額	繰越額	増 減
戦略研究費	2,450,000	2,450,000	2,441,337	0	▲ 8,663
重点研究費	15,378,000	16,683,000	15,007,625	1,675,375	0
職員研究奨励費	0	0	0	0	0
経常研究費	26,937,000	28,187,000	26,761,865	0	▲ 1,425,135
依頼試験費	0	0	0	0	0
技術普及指導費	222,000	258,380	253,640	0	▲ 4,740
外部資金確保対策費	0	0	0	0	0
研究用備品整備費	0	16,946,600	16,946,600	0	0
維持管理経費（研究）	725,000	725,000	725,000	0	0
維持管理経費（一般）	31,423,000	33,634,000	32,719,107	0	▲ 914,893
研究関連維持管理経費	0	69,000	68,400	0	▲ 600
運営費	54,157,000	56,675,223	53,961,828	0	▲ 2,713,395
共同研究費	0	1,300,000	1,300,000	0	0
国庫受託研究費	3,638,000	3,450,000	3,450,000	0	0
道受託研究費	5,097,000	5,679,000	5,678,939	0	▲ 61
その他受託研究費	57,470,000	87,709,263	87,709,263	0	0
施設整備費（繰越積立金）	40,700,000	40,700,000	40,700,000	0	0
補助金	0	0	0	0	0
科学研究費補助金	380,000	524,182	179,948	250,674	▲ 93,560
合 計	238,577,000	294,990,648	287,903,552	1,926,049	5,161,047

7. 試験ほ場

1) ほ場整備

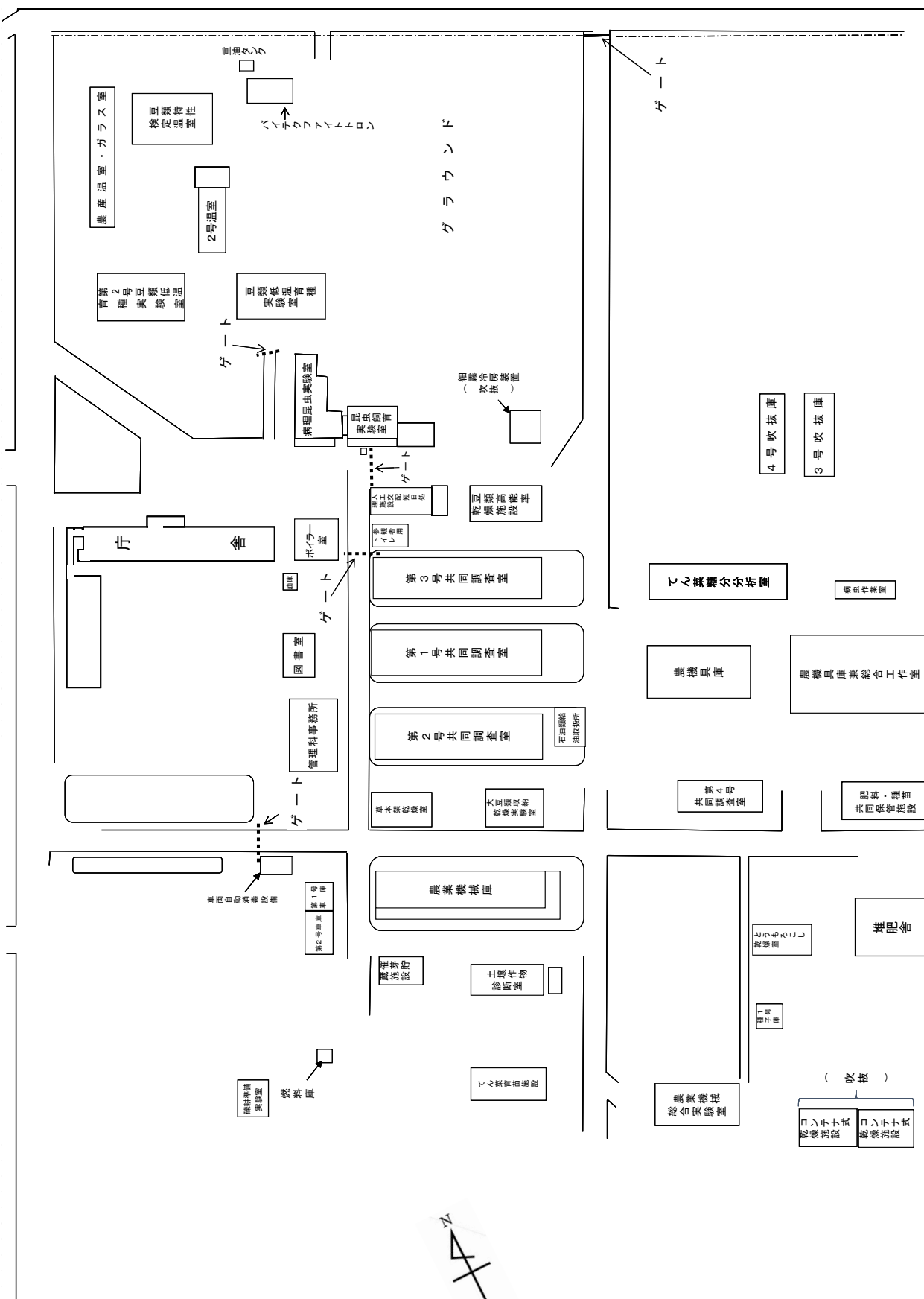
側、B4 東側、D2 東側のカラマツ植栽を行った。

防風林の計画的更新を行っており、本年度は A5 東

2) 試験ほ場作付図



8. 施設等配置図



B 作 況

1. 気象の概要

1) 前年9月から根雪始めまでの経過

9月 平均気温は、上旬・中旬が高く、下旬が平年並。降水量は、1ヶ月を通じて少なかった。日照時間は、上旬がかなり多く、中旬がやや多く、下旬がやや少なかった。

10月 平均気温は、1ヶ月を通じて高かった。降水量は、上旬が少なく、中旬がやや少なく、下旬がやや多かった。日照時間は、上旬がやや少なく、中旬・下旬がやや多かった。

11月 平均気温は、上旬が低く、中旬が平年並、下旬が高かった。降水量は、上旬・中旬が少なく、下旬が高かった。日照時間は、上旬が多く、中旬が平年並、下旬がやや少なかった。

12月 平均気温は、上旬が高く、中旬がやや低い、下旬が平年並。降水量は、1ヶ月を通じて少なかった。日照時間は、上旬が平年並、中旬がやや多く、下旬が平年並であった。

2) 根雪期間中の経過

1月 平均気温は、上旬がやや高く、中旬が高く、下旬がかなり高かった。降水量は、上旬がやや少なく、中旬が少なく、下旬がやや少なかった。日照時間は、上旬・中旬が平年並、下旬が少なかった。

2月 平均気温は、上旬がかなり高く、中旬がやや高く、下旬が平年並。降水量は、上旬がかなり多く、中旬・下旬がやや少なかった。日照時間は、上旬がかなり少なく、中旬・下旬が平年並であった。

3月 平均気温は、上旬がやや低く、中旬が低く、下旬がやや低かった。降水量は、上旬が少なく、中旬が多く、下旬がやや多かった。日照時間は、上旬がやや低く、中旬がやや多く、下旬がかなり少なかった。

3) 根雪終わり以降の経過

4月 平均気温は、上旬が平年並、中旬が高く、下旬が低かった。降水量は、上旬が平年並、中旬・下旬が多かった。日照時間は、上旬が平年並、中旬がかなり少なく、下旬が少なかった。

5月上旬 平均気温は低く、降水量は平年並、日照時間は少なかった。

5月中旬 平均気温は高く、降水量はやや少なく、日照時間はやや多かった。

5月下旬 平均気温は低く、降水量は平年並、日照時間

はやや少なかった。

6月上旬 平均気温は高く、降水量は少なく、日照時間はやや多かった。

6月中旬 平均気温はかなり高く、降水量は少なく、日照時間はかなり多かった。

6月下旬 平均気温はかなり高く、降水量は少なく、日照時間はかなり多かった。

7月上旬 平均気温はかなり高く、降水量は少なく、日照時間はかなり多かった。

7月中旬 平均気温は高く、降水量はやや少なく、日照時間は平年並であった。

7月下旬 平均気温はかなり高く、降水量は平年並、日照時間はかなり多かった。

8月上旬 平均気温は高く、降水量はやや少なく、日照時間は少なかった。

8月中旬 平均気温は高く、降水量はかなり少なく、日照時間はかなり多かった。

8月下旬 平均気温は高く、降水量は少なく、日照時間は平年並であった。

9月上旬 平均気温は高く、降水量はやや少なく、日照時間は平年並であった。

9月中旬 平均気温は高く、降水量はかなり多く、日照時間はかなり多かった。

9月下旬 平均気温はやや高く、降水量は多く、日照時間はかなり多かった。

10月上旬 平均気温は高く、降水量は少なく、日照時間はやや多かった。

10月中旬 平均気温はやや低く、降水量は少なく、日照時間はかなり少なかった。

10月下旬 平均気温は低く、降水量は平年並、日照時間はやや少なかった。

11月上旬 平均気温は低く、降水量は多く、日照時間はやや少なかった。

11月中旬 平均気温は低く、降水量は少なく、日照時間はやや多かった。

4) 農耕期間(5月上旬から9月下旬)の気象経過

平均気温は、平年に比べて、5月上・下旬が低かったが、6月上旬～9月下旬が高く経過し、特に6月中旬～7月上旬および7月下旬がかなり高かった。この期間の平均気温の積算値は平年より 323℃高い 2,917℃となり、平年比 112%であった。

降水量は、平年に比べて、5月上旬～9月上旬が平年並から少なく、9月中・下旬が多かった。この期間の降水量の積算値は平年より169mm少ない392mmとなり、平年比70%であった。降水日数は平年より7日少ない49日となり、平年比87%であった。

日照時間は、平年に比べて、5月上・下旬、8月上旬、9月上旬が少なかったが、それ以外の期間は平年並から多く経過した。特に6月中旬～7月上旬、7月下旬、8月

中旬、9月中・下旬はかなり多かった。この期間の日照時間の積算値は平年より160時間多い916時間となり、平年比121%であった。

以上から、本年の農耕期間（5月上旬から9月下旬）の気象は、6月中旬～7月上旬が高温・少雨・多照で経過し、この傾向が9月上旬まで続いたことが特徴的であった。平年に比べて、積算の平均気温は高く、降水日数および降水量は少なく、日照時間は多かった。

表 B-1 農耕期間における気象観測値の積算値（芽室アメダス）

		平均気温 (℃)	最高気温 (℃)	最低気温 (℃)	日照時間 (hrs)	降水量 (mm)	降水日数 (日)
4月中旬～ 11月上旬	本年	3,337	4,577	2,183	584	74	1,205
	平年	3,121	4,358	1,982	702	75	1,124
	比較	216	219	201	△ 118	△ 1	81
5月～9月	本年	2,917	3,869	2,042	392	49	916
	平年	2,615	3,488	1,843	534	55	759
	比較	302	381	199	△ 142	△ 6	157

注) 平年値は平成27年～令和6年の10年平均値。

表 B-2 季節表（十勝農試）

項目	根雪始 (月.日)	根雪終 (月.日)	積雪期間 (日)	降雪終 (月.日)	耕鋤始 (月.日)	晩霜 (月.日)	初霜 (月.日)	無霜期間 (日)	降雪始 (月.日)
本年	R7.1.24	R7.4.4	71	R7.4.4	R7.4.9	R7.5.1	R7.10.10	161	R7.10.28
平年	12.10	3.29	110	4.18	4.13	5.2	10.11	161	11.10
比較(日)	45	6	△ 39	△ 14	△ 4	△ 1	△ 1	0	△ 13

注) 平年値は平成27年～令和6年の10年平均値。

表 B-3 気象表

年月	旬	平均気温(℃)			最高気温(℃)			最低気温(℃)			降水量(mm)			降水日数(日)			日照時間(hrs)		
		本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
R6年	上旬	20.7	18.9	1.8	27.4	24.1	3.3	13.6	14.5	-0.9	1.0	33.2	-32.2	1.0	4.1	-3.1	75.4	45.4	30.0
	9月 中旬	17.5	16.1	1.4	24.4	21.2	3.2	10.2	11.2	-1.0	17.0	55.1	-38.1	1.0	4.5	-3.5	53.6	46.7	6.9
	下旬	14.3	14.1	0.2	19.7	20.1	-0.4	9.2	8.3	0.9	9.0	28.3	-19.3	2.0	3.0	-1.0	45.3	53.8	-8.5
	上旬	14.0	12.0	2.0	19.0	17.7	1.3	9.3	6.3	3.0	23.0	47.1	-24.1	3.0	4.2	-1.2	43.7	52.0	-8.3
10月	中旬	10.2	9.0	1.2	17.1	15.1	2.0	2.0	2.7	-0.7	20.5	29.2	-8.7	2.0	3.0	-1.0	69.5	60.9	8.6
	下旬	9.1	7.2	1.9	15.7	13.0	2.7	2.4	1.5	0.9	27.5	17.9	9.6	1.0	3.0	-2.0	76.4	64.3	12.1
	上旬	4.6	5.9	-1.3	10.7	10.9	-0.2	-2.2	0.6	-2.8	7.5	28.7	-21.2	3.0	3.2	-0.2	62.0	49.4	12.6
11月	中旬	3.3	2.9	0.4	8.8	7.7	1.1	-2.8	-2.2	-0.6	0.5	22.3	-21.8	1.0	2.9	-1.9	52.0	51.9	0.1
	下旬	1.4	-0.2	1.6	5.7	4.6	1.1	-3.7	-5.6	1.9	31.5	14.1	17.4	5.0	2.3	2.7	45.2	54.3	-9.1
	上旬	-1.4	-3.0	1.6	2.5	2.3	0.2	-6.8	-9.0	2.2	0.5	15.7	-15.2	1.0	2.4	-1.4	56.8	55.0	1.8
12月	中旬	-5.3	-4.7	-0.6	-0.5	0.3	-0.8	-11.5	-10.7	-0.8	0.0	10.2	-10.2	0.0	2.0	-2.0	59.3	52.6	6.7
	下旬	-5.9	-5.9	0.0	-0.8	-0.8	0.0	-12.5	-12.5	0.0	2.0	16.4	-14.4	2.0	1.4	0.6	57.5	58.7	-1.2
R7年	上旬	-6.6	-7.5	0.9	-0.8	-1.9	1.1	-14.3	-14.9	0.6	0.5	6.2	-5.7	1.0	1.2	-0.2	56.2	58.0	-1.8
1月	中旬	-6.1	-8.7	2.6	-0.6	-2.6	2.0	-12.7	-15.8	3.1	0.0	17.0	-17.0	0.0	2.7	-2.7	54.2	53.7	0.5
	下旬	-3.0	-8.0	5.0	1.2	-2.3	3.5	-7.7	-15.8	8.1	9.0	14.4	-5.4	2.0	2.2	-0.2	45.6	60.9	-15.3
	上旬	-5.2	-8.8	3.6	-0.3	-3.0	2.7	-12.2	-16.6	4.4	57.5	6.6	50.9	3.0	1.4	1.6	33.6	62.9	-29.3
2月	中旬	-4.7	-5.4	0.7	0.1	0.4	-0.3	-13.5	-12.9	-0.6	5.5	15.3	-9.8	3.0	2.4	0.6	49.3	54.6	-5.3
	下旬	-5.4	-5.5	0.1	2.3	0.1	2.2	-14.7	-13.1	-1.6	4.5	12.0	-7.5	1.0	1.8	-0.8	59.5	58.0	1.5
	上旬	-3.8	-3.2	-0.6	1.6	2.4	-0.8	-11.3	-10.3	-1.0	10.0	41.2	-31.2	2.0	2.6	-0.6	76.4	57.3	19.1
3月	中旬	-1.8	-0.2	-1.6	3.8	4.8	-1.0	-8.7	-6.1	-2.6	28.5	8.0	20.5	3.0	1.6	1.4	62.0	68.8	-6.8
	下旬	1.0	1.8	-0.8	6.4	7.4	-1.0	-4.7	-4.0	-0.7	18.0	11.0	7.0	6.0	2.6	3.4	56.3	82.4	-26.1
	上旬	4.8	4.4	0.4	10.8	10.2	0.6	-1.2	-1.4	0.2	12.0	15.4	-3.4	4.0	2.3	1.7	64.5	70.6	-6.1
4月	中旬	8.0	6.6	1.4	12.7	12.8	-0.1	3.5	0.6	2.9	60.5	29.2	31.3	7.0	3.6	3.4	30.6	65.5	-34.9
	下旬	6.6	8.5	-1.9	12.2	15.5	-3.3	1.7	1.5	0.2	37.5	19.5	18.0	4.0	2.7	1.3	54.9	72.7	-17.8
	上旬	9.9	11.0	-1.1	15.8	17.6	-1.8	4.1	3.8	0.3	10.5	11.4	-0.9	2.0	2.5	-0.5	48.7	68.7	-20.0
5月	中旬	14.5	12.2	2.3	21.8	19.3	2.5	8.1	5.3	2.8	8.5	17.3	-8.8	2.0	2.7	-0.7	78.5	69.1	9.4
	下旬	12.8	14.5	-1.7	19.8	21.2	-1.4	6.4	7.8	-1.4	21.5	25.0	-3.5	2.0	3.6	-1.6	63.7	78.1	-14.4
	上旬	16.0	14.4	1.6	23.1	20.8	2.3	8.6	8.7	-0.1	8.5	31.3	-22.8	1.0	3.2	-2.2	65.0	58.7	6.3
6月	中旬	19.4	15.5	3.9	25.9	20.8	5.1	13.0	11.0	2.0	17.0	30.7	-13.7	4.0	3.1	0.9	83.8	45.3	38.5
	下旬	22.2	16.8	5.4	29.5	22.3	7.2	15.1	12.0	3.1	9.5	35.6	-26.1	3.0	3.9	-0.9	73.9	46.6	27.3
	上旬	24.1	18.7	5.4	30.4	24.3	6.1	18.0	14.2	3.8	9.0	32.1	-23.1	3.0	3.7	-0.7	72.5	46.6	25.9
7月	中旬	22.0	20.0	2.0	28.2	25.6	2.6	17.2	15.7	1.5	22.0	31.8	-9.8	5.0	3.8	1.2	41.7	41.5	0.2
	下旬	24.9	21.7	3.2	30.3	27.2	3.1	19.7	17.6	2.1	27.5	24.9	2.6	4.0	3.3	0.7	55.7	42.2	13.5
	上旬	23.1	21.6	1.5	27.4	26.8	0.6	19.9	17.6	2.3	42.0	48.9	-6.9	7.0	3.9	3.1	30.5	40.6	-10.1
8月	中旬	22.8	19.8	3.0	29.0	24.6	4.4	17.5	16.2	1.3	5.0	66.4	-61.4	2.0	5.6	-3.6	58.4	31.3	27.1
	下旬	21.0	19.9	1.1	25.7	24.7	1.0	18.0	15.9	2.1	21.5	67.3	-45.8	5.0	5.3	-0.3	41.9	40.5	1.4
	上旬	20.3	19.1	1.2	26.1	24.6	1.5	15.4	14.3	1.1	20.0	30.4	-10.4	4.0	3.6	0.4	53.8	49.8	4.0
9月	中旬	17.9	16.4	1.5	24.9	21.7	3.2	10.6	11.3	-0.7	117.0	48.4	68.6	3.0	4.2	-1.2	78.1	47.7	30.4
	下旬	15.0	14.3	0.7	21.6	20.0	1.6	8.2	8.7	-0.5	52.5	28.7	23.8	2.0	3.0	-1.0	69.6	50.9	18.7
	上旬	13.6	12.4	1.2	19.3	18.0	1.3	7.4	6.8	0.6	7.5	48.0	-40.5	2.0	4.2	-2.2	59.2	50.0	9.2
10月	中旬	8.6	9.2	-0.6	13.2	15.4	-2.2	3.9	2.8	1.1	4.5	23.9	-19.4	4.0	2.8	1.2	43.0	62.5	-19.5
	下旬	5.2	7.5	-2.3	10.9	13.2	-2.3	-0.2	1.7	-1.9	17.0	20.6	-3.6	2.0	3.0	-1.0	56.3	64.1	-7.8
	上旬	3.9	5.7	-1.8	8.9	10.8	-1.9	-0.6	0.3	-0.9	65.0	26.6	38.4	6.0	3.1	2.9	44.7	50.2	-5.5
11月	中旬	1.7	3.0	-1.3	6.4	8.0	-1.6	-3.5	-2.2	-1.3	10.0	20.7	-10.7	2.0	2.8	-0.8	60.5	52.1	8.4

備考 1 観測値は、芽室アメダスのデータ。

2 平年値は平成27年～令和6年の10年平均値。

3 平均気温は毎時24回の平均値。

2. 当場の作況

1) 秋まき小麦

作況：平年並

事由：播種期および出芽期は平年より3日遅かった。
根雪始は平年より45日遅く、根雪終は平年より6日遅いため、積雪期間は39日短かった。起生期は平年より7日遅く、起生期の茎数は越冬前と同様にやや多かった。
4月上旬から5月下旬の気温は平年並であり、出穂期は平年より4日遅かった。6月上旬から7月上旬までの気温がかなり高く推移したことから、成熟期は平年より8

日早かった。平年と比べて稈長はやや長く、穂長は同程度、穂数はやや多かった。7月4日の降雨により倒伏が“少”程度発生した。子実重は平年比108%とやや多かったが、容積重、2.2mm篩上率、千粒重は平年を下回った。検査等級は、1等であった。

以上のことから、本年の作況は平年並である。

表B-4 十勝農試における令和7年度の秋まき小麦の作況調査成績

品種名		きたほなみ		
項目／年次		本年	平年	比較
播種期（月日）		9.24	9.21	3
出芽期（月日）		10.1	9.28	3
起生期（月日）		4.8	4.1	7
出穂期（月日）		6.4	5.31	4
成熟期（月日）		7.10	7.18	△ 8
葉数(枚)	10月20日	3.8	3.8	0.0
草丈 (cm)	10月20日	20.5	21.3	△ 0.8
	5月20日	59.3	52.1	7.2
	6月20日	101.2	92.0	9.2
茎数 (本/㎡)	10月20日	702	599	103
	11月15日	1,864	1257	607
	起生期	2,109	1788	321
	5月20日	1,367	1,364	3
	6月20日	839	759	80
成熟期	稈長(cm)	88	81	7
	穂長(cm)	8.5	8.8	△ 0.3
	穂数(本/㎡)	819	748	71
子実重(kg/10a)		837	778	59
同上対平年比(%)		108	100	8
リットル重(g)		812	842.4	△ 30
2.2mm篩上率(%)		86.0	94.8	△ 8.8
千粒重(g)		34	39.2	△ 5.2
検査等級		1	1	-

備考 1 平年値は、前7か年中、令和3年収穫（豊作年）、平成30年収穫（凶作年）を除く5年平均。

年次は収穫年。

2 △は平年より早、少、短を表す。

2) 大豆

作況：良

事由：播種期は平年より1日早い5月19日であった。播種後の降水量は平年並で土壌水分が十分にあったことから、出芽は斉一であった。出芽期は平年より1日早い5月30日で、出芽率は平年を上回った。その後も高温多照で経過したため、開花始は平年より9日早かった。開花後も気象は高温多照で経過したため、登熟は順調に進行し、成熟期は平年より11日早かった。主茎長は平年よ

りやや短く、主茎節数は平年並で、分枝数は平年を上回った。着莢数と百粒重は平年並であったが、一莢内粒数は平年を大きく上回り、子実重は平年比112%と多収であった。屑粒率は0.1%と平年より低く、検査等級は1等で平年を上回った。

以上のことから、本年の作況は良である。

表 B-5 十勝農試における令和7年度の大豆の作況調査成績

品種名		ユキホマレ		
項目／年次		本年	平年	比較
播種期(月日)		5.19	5.20	△ 1
出芽期(月日)		5.30	5.31	△ 1
出芽率(%) ³⁾		98.0	89.7	8.3
開花始(月日)		1.7	7.13	△ 9
成熟期(月日)		9.12	9.23	△11
主茎長 (cm)	6月20日	19.3	13.0	6.3
	7月20日	68.6	67.0	1.6
	8月20日	69.9	75.2	△ 5.3
	9月20日	67.2	73.5	△ 6.3
	成熟期	67.2	73.3	△ 6.1
主茎節数 (節)	6月20日	4.4	3.1	1.3
	7月20日	11.2	10.4	0.8
	8月20日	11.4	10.8	0.6
	9月20日	10.9	10.8	0.1
	成熟期	10.9	10.9	0.0
分枝数 (本/株)	7月20日	6.3	4.9	1.4
	8月20日	7.4	4.9	2.5
	9月20日	6.2	4.8	1.4
	成熟期	6.2	4.8	1.4
着莢数 (莢/株)	8月20日	75.4	76.7	△ 1.3
	9月20日	78.0	77.0	1.0
	成熟期	78.0	77.4	0.6
一莢内粒数(粒)		2.00	1.80	0.20
子実重(kg/10a) ⁴⁾		444	395	49
百粒重(g) ⁴⁾		38.2	37.9	0.3
屑粒率(%)		0.1	5.1	△ 5.0
品質(検査等級) ⁵⁾		1等	2中	—
子実重対平年比(%)		112	100	12

備考 1 平年値は、前7か年中、令和6年(豊作年)及び平成30年(凶作年)を除く5か年平均である。

2 △は平年と比較して「早」、「少」、「短」、「軽」、「低」を表す。

3 間引き直前に調査した値。

4 水分含量15%に換算した値。

5 農産物検査による等級。2等・3等は上・中・下に分けた。

3) 小豆

作況：不良

事由：播種期は平年より1日遅かったが、播種前後の十分な降雨により出芽期は平年並であった。生育期間を通して高温に経過したことから開花始は平年より5日早く、成熟期は6～8日早かった。また、主茎長および主茎節数は平年を上回った。7月の高温少雨により着莢障害が見られ、着莢数および一莢内粒数は平年を下回った。

また、登熟期間が高温に経過したため、百粒重は平年を下回り、子実重の平年比は「きたろまん」で86%、「エリモ167」で70%と平年を大きく下回った。屑粒率は平年より低く、検査等級は平年より優った。

以上のことから、本年の作況は不良である。

表 B-6 十勝農試における令和7年度の小豆の作況調査成績

品種名		きたろまん			エリモ167		
項目／年次		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期(月日)		5.26	5.25	1	5.26	5.25	1
出芽期(月日)		6.9	6.8	1	6.9	6.9	0
開花始(月日)		7.16	7.21	△ 5	7.16	7.21	△ 5
成熟期(月日)		9.7	9.13	△ 6	9.6	9.14	△ 8
主茎長 (cm)	6月20日	4.6	4.1	0.5	5.3	4.2	1.1
	7月20日	20.6	21.8	△ 1.2	23.4	22.7	0.7
	8月20日	76.8	69.6	7.2	70.1	67.7	2.4
	9月20日	82.8	73.5	9.3	72.2	70.1	2.1
	成熟期	82.8	73.4	9.4	72.2	70.9	1.3
本葉数 (枚)	6月20日	1.2	0.5	0.7	1.2	0.5	0.7
	7月20日	8.4	6.9	1.5	9.3	7.1	2.2
	8月20日	17.8	12.9	4.9	18.3	14.0	4.3
主茎節数(節)	9月20日	18.2	15.3	2.9	18.7	16.2	2.5
	成熟期	18.2	15.3	2.9	18.7	16.3	2.4
分枝数 (本/株)	7月20日	3.1	3.0	0.1	3.8	2.9	0.9
	8月20日	2.9	3.0	△ 0.1	4.2	4.0	0.2
	9月20日	3.1	2.9	0.2	3.8	3.5	0.3
	成熟期	3.1	2.8	0.3	3.8	3.5	0.3
着莢数 (莢/株)	8月20日	51.8	51.0	0.8	66.7	59.2	7.5
	9月20日	41.1	48.4	△ 7.3	48.2	55.0	△ 6.8
	成熟期	41.1	48.4	△ 7.3	48.2	54.1	△ 5.9
一莢内粒数(粒)		5.60	5.99	△ 0.39	5.61	5.92	△ 0.31
総重(kg/10a)		542	587	△ 45	423	608	△ 185
子実重(kg/10a)		298	345	△ 47	239	342	△ 103
百粒重(g)		14.6	16.3	△ 1.7	11.8	14.3	△ 2.5
屑粒率(%)		1.7	5.3	△ 3.6	2.5	4.2	△ 1.7
品質(検査等級)		1等	2下	－	2中	2下	－
子実重対平年比(%)		86	100	△ 14	70	100	△ 30

備考 1 平年値は、前7か年中、令和3年(豊作年)及び令和2年(凶作年)を除く5か年平均である。

2 △は、平年と比較して「早」、「少」、「短」、「軽」、「低」を表す。

3 着莢数は、8月20日現在は莢長3cm以上、9月20日現在及び成熟期は稔実莢を示す。

4 子実重及び百粒重は、水分含量15%に換算した値。

5 品質(検査等級)は、農産物検査による等級。2等・3等は上・中・下に分けた。

4) 菜豆

作況 不良

事由：播種期は平年並であった。出芽期は平年並から1日遅かった。その後はかなり高温に経過したため、開花始は平年より8-10日、成熟期は11-18日早かった。生育期間を通して少雨であったため、草丈は平年より短く、主茎節数は平年並から少なかった。分枝数は平年並であった。

着莢数および一莢内粒数は少なく、百粒重は軽かった。子実重は平年比44-51%と平年を著しく下回った。篩下粒が多く、屑粒率は平年をかなり上回った。検査等級は平年をやや下回った。

以上のことから、本年の作況は不良である。

表 B-7 十勝農試における令和7年度の菜豆の作況調査成績

品種名		雪手亡			大正金時		
項目／年次		本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期(月日)		5.27	5.27	0	5.27	5.27	0
出芽期(月日)		6.6	6.6	0	6.8	6.7	1
開花始(月日)		7.7	7.17	△ 10	7.1	7.9	△ 8
成熟期(月日)		8.29	9.16	△ 18	8.16	8.27	△ 11
草丈 (cm)	6月20日	12.2	7.5	4.7	16.1	10.2	5.9
	7月20日	61.7	60.7	1.0	42.0	47.4	△ 5.4
	8月20日	59.3	70.4	△ 11.1	0.0	47.7	△ 47.7
	成熟期	59.3	68.2	△ 8.9	42.0	47.6	△ 5.6
葉数 (枚)	6月20日	2.3	1.1	1.2	2.1	1.0	1.1
	7月20日	7.1	6.6	0.5	3.0	3.8	△ 0.8
	8月20日	7.1	7.0	0.1	0.0	3.6	△ 3.6
主茎節数(節) 成熟期		9.1	8.7	0.4	5.0	5.7	△ 0.7
分枝数 (本/株)	7月20日	14.8	8.7	6.1	7.8	7.6	0.2
	8月20日	8.5	8.2	0.3	0.0	6.9	△ 6.9
	成熟期	8.5	8.4	0.1	7.0	7.2	△ 0.2
着莢数 (莢/株)	8月20日	26.5	28.5	△ 2.0	0.0	19.1	△ 19.1
	成熟期	26.5	31.4	△ 4.9	16.6	18.7	△ 2.1
一莢内粒数(粒)		2.99	4.35	△ 1.36	2.14	2.74	△ 0.60
総重(kg/10a)		500	718	△ 218	340	525	△ 185
子実重(kg/10a)		195	379	△ 184	106	241	△ 135
子実重平年比(kg/10a)		51	100	△ 49	44	100	△ 56
百粒重(g)		26.0	33.7	△ 7.7	48.1	61.1	△ 13.0
屑粒率(%)		54.1	12.4	41.7	77.5	41.9	35.6
品質(検査等級)		2中	2上		3下	3中	

- 備考 1 平年値は、前7か年中、平成30年(豊作年)及び令和6年(凶作年)を除く5か年平均である。
2 △は、平年と比較して「早」、「少」、「短」、「軽」、「低」を表す。
3 屑粒は、病害粒、変色粒(色流れ)、未熟粒等を含む。
4 子実重、百粒重は水分含量16.0%に換算した値。
5 品質(検査等級)は、農産物検査規格に準じるものである。

5) 馬鈴しょ

作況：平年並

事由：植付期は平年より2日早く、萌芽期は1日遅かった。萌芽後、6月上旬の気温が平年より高かったことから生育は進み、開花始は平年より4～6日早かった。6月下旬～7月中旬の降水量が平年より少なかったため、茎長は、平年を下回った。開花始以降の気温も平年より高く経過したことから、枯凋期は「男爵薯」、「トヨシロ」ともに平年より4日早かった。

「男爵薯」では、上いも数が平年よりやや多く、上いも

の平均重は平年並であったため、上いも重は平年比106%とやや上回った。でん粉価は平年より3.0ポイント低かった。

「トヨシロ」では、上いも数は平年より少なく、上いもの平均重は平年より重かったため、上いも重は平年比103%と平年並であった。でん粉価は平年より1.5ポイント低かった。

以上のことから、本年の作況は平年並である。

表 B-8 十勝農試における令和7年度の馬鈴しょの作況調査成績

品種名		男爵薯			トヨシロ		
項目／年次		本年	平年	比較	本年	平年	比較
植付期(月日)		5.08	5.10	△ 2	5.08	5.10	△ 2
萌芽期(月日)		5.30	5.29	1	5.31	5.30	1
開花始(月日)		6.23	6.27	△ 4	6.22	6.28	△ 6
枯凋期(月日)		8.16	8.20	△ 4	8.23	8.27	△ 4
茎長 (cm)	6月20日	35.0	24.8	10.2	33.7	22.5	11.2
	7月20日	45.4	51.9	△ 6.5	55.8	66.9	△ 11.1
	8月20日	46.6	52.8	△ 6.2	55.4	68.4	△ 13.0
茎数 (本/株)	6月20日	4.9	4.3	0.6	3.5	3.0	0.5
	7月20日	5.0	4.5	0.5	3.8	3.1	0.7
7月20日	上いも重(kg/10a)	2,210	2,314	△ 104	2,849	2,732	117
8月20日	上いも重(kg/10a)	4,084	3,907	177	4,249	4,155	94
	同上平年比(%)	105	100	5	102	100	2
	でん粉価(%)	12.0	15.1	△ 3.1	14.3	16.5	△ 2.2
収穫期	上いも数(個/株)	13.1	12.1	1.0	9.5	10.7	△ 1.2
	上いも一個重(g)	70	72	△ 2	102	89	13
	上いも重(kg/10a)	4,084	3,849	235	4,306	4,173	133
	中以上いも重(kg/10a)	3,139	2,899	240	3,927	3,598	329
	でん粉価(%)	12.0	15	△ 3.0	14.5	16.0	△ 1.5
	平年比(%)	106	100	6	103	100	3

備考 1 平年値は、前7か年中、令和5年（豊作年）及び令和6年（凶作年）を除く5か年平均である。

2 △は、平年より「早」、「少」、「短」、「軽」、「低」を表す。

6) てん菜

作況：平年並

事由：移植期は4月23日で平年より4日早く、移植後すぐに降雪があったが障害はなく、活着は順調であった。6月下旬から7月中旬までの気温はかなり高く、7月上旬中旬頃は少雨で、干ばつであったが、7月下旬から8月上旬の降雨により生育は回復した。生育期間の気温は高く、日照時間はやや多く、降水量は少なかった。収穫は

平年より2日早い10月14日に行った。褐斑病の発生は少なかった。根重は平年比118%で、根中糖分は平年より2.48ポイント低い、平年比84%で、糖量は同比100%であった。

以上のことから、本年の作況は平年並である。

表 B-9 十勝農試における令和7年度のてん菜の作況調査成績

品種名		アンジー		
項目／年次		本年	平年	比較
播種期(月日)		3.17	3.15	2
発芽期(月日)		3.24	3.24	0
移植期(月日)		4.23	4.27	△ 4
収穫期(月日)		10.14	10.16	△ 2
草 丈 (cm)	5月20日	9.9	7.4	3
	6月20日	50.6	40.3	10.3
	7月20日	55.2	63.2	△ 8.0
	8月20日	56.1	64.9	△ 8.8
	9月20日	50.9	62.8	△ 11.9
生葉数 (枚)	5月20日	9.3	7.4	1.9
	6月20日	17.3	16.2	1.1
	7月20日	20.1	24.9	△ 4.8
	8月20日	26.1	28.1	△ 2.0
	9月20日	28.6	31.9	△ 3.3
根 重 (kg/10a)	7月20日	2,661	2,632	29
	8月20日	6,543	5,916	627
	9月20日	8,616	7,575	1041
根 重 (kg/10a)		8,969	7,573	1396
根中糖分 (%)		13.37	15.85	△ 2.48
糖 量 (kg/10a)		1,199	1,200	△ 1
平年比 (%)	根重	118	100	18
	根中糖分	84	100	△ 16
	糖量	100	100	0

備考 1 平年値は、前7か年中、令和3年（豊作年）及び令和5年（凶作年）を除く5か年平均である。

2 △は、平年より「早」、「少」、「短」、「軽」、「低」を表す。

3 本年より調査品種を「アンジー」に変更した。

C 試験研究および地域支援活動の概要

1. 豆類畑作グループ

〔大豆育種関連〕

大豆新品種育成は、経常研究「大豆品種開発事業Ⅲ」（令和 7～11 年）において、障害抵抗性の複合化、豆腐等加工適性の向上を中心とした 32 組合せの交配を行い、冬季 F1 養成を実施した。F2～F3 世代は集団育種法、F4 世代以降は系統育種法により選抜・世代を進めた。育成系統生産力検定予備試験には 39 品種系統を供試して収量・品質調査を行うとともに、耐病虫性検定および系統適応性検定等を実施した。十系 5 系統を継続とし、新たに 20 系統に十系番号を付した。生産力検定試験には黒大豆「十育 281 号」を供試し、収量・品質調査および耐冷性、耐病虫性検定を行うとともに優良品種決定調査、加工適性試験（実需者試験含む）等を実施した。「十育 281 号」は裂皮発生が少なく多収でダイズシストセンチュウレース 3 抵抗性で、既存品種並みの煮豆加工適性が期待できることから継続検討とした。

〔小豆育種関連〕

小豆新品種育成は、ニーズに応える将来の品種開発に向けた材料を養成するため、29 組合せの人工交配を行い、交配後の材料は、F1 世代の冬季温室利用による養成後、F2～F4 世代を主に集団育種法（一部 F3 世代は春季暖地による世代促進を含む）、F5 世代以降は系統育種法により選抜・世代を進めた。育成系統生産力検定予備試験には普通小豆 32 系統、大納言 3 系統（うち系統適応性検定試験として中央農試に普通小豆 17 系統、大納言小豆 3 系統）、小規模生産力検定予備試験には計 145 系統（うち中央農試に 53 系統）を供試し、収量、品質の評価を行い、併せて耐病性（落葉病・茎疫病・萎凋病レース抵抗性）、耐冷性（低温育種実験室）等の特性検定試験を実施した。これらの試験結果から、胚軸長がやや長くコンバイン収穫向け系統である「十系 1481 号」を「十育 190 号」として地方番号を付し、十系 4 系統を継続検討とした。この他新たに 12 系統に十系番号を付した。生産力検定試験および各種特性検定試験、優良品種決定調査等には、コンバイン収穫向け系統「十育 187 号」および「十育 189 号」、大納言系統「十育 188 号」の計 3 系統を供試した。「十育 187 号」は、コンバイン収穫適

性に優れるものの低収であることから廃棄とした。

「十育 188 号」は、子実重や品質に優れることから継続検討として優決現地試験に供試することとした。

「十育 189 号」は、コンバイン収穫適性が見込めるものの、今年度のヘッドロス試験において対照品種との差が判然としなかったことから、優決基本に留め置きコンバイン収穫適性について再検討を行うこととした。

〔菜豆育種関連〕

菜豆新品種育成試験では、良質、多収、病虫害抵抗性を目標に冬季温室で交配し、集団育種法で選抜した。小規模生産力検定予備試験に手亡 22 系統、金時 86 系統、白金時 5 系統、洋風料理向け赤いんげんめ 14 系統、生産力検定予備試験に時 4 系統、白金時 1 系統を供試した。また、耐病性（黄化病、炭そ病）の特性検定試験を実施した。これらの試験結果から、金時 1 系統、白金時 1 系統に十系番号を付した。また、十系系統のうち、金時 4 系統、白金時 1 系統を継続検討とした。生産力検定試験（優良品種決定基本調査）および特性検定試験には、金時「十育 B 87 号」および白金時「十育 E 14 号」の 2 系統を供試し、そのうち「十育 E 14 号」は優良品種決定現地調査に供試した。「十育 B 87 号」は、継続検討として優決現地試験に供試して各地での収量性を確認する。「十育 E 14 号」は引き続き優決基本とあわせて現地での実規模栽培試験や実需評価を行うこととし、品種化について判断する。

〔畑作研究関連〕

てん菜は、「輸入品種検定試験」（優決基本相当）において、9 系統の糖量等を対照品種と比較検討した。

「HT55」「KWS 3K503」が優良品種に認定された。「特性検定試験」では褐斑病と根腐病について試験を実施した。「直播栽培に適した病害抵抗性と収量特性を示すテンサイ品種候補の開発」では、直播栽培での収量性評価および UAV による生育解析を行った。

秋まき小麦は、「地域適応性検定試験」（優決基本相当）において 4 系統の収量性や障害耐性等を対照品種と比較検討した。「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進」では、北見農試育成の 16 系統、北農研育成の 2 系統、北見・北農研共同育成の 6 系統について穂発芽性検定を実施し、育成系

統改廃の参考とした。また、北見農試育成の系適世代 11 系統の十勝農試における適応性を検討した。「麦類新優良品種普及促進事業」における種子増殖において、「きたほなみ R」の特別増殖を実施した。

春まき小麦では、「地域適応性検定試験」および「春まき小麦の品種選定試験」（優決基本相当）において 3 系統の適応性を検討した。「HW10 号」が優良品種に認定された。「麦類新優良品種普及促進事業」における種子増殖において、「HW10 号」の特別増殖を実施した。

馬鈴しょは、「地域適応性検定試験」、「輸入品種等選定試験」および「長期貯蔵性に優れ安定生産可能なポテトチップス加工用ばれいしょ品種の開発」（優決基本相当）において、生食用 3 系統、加工用 5 系統、でん粉原料用 1 系統について適応性を検討した。「地域適応性検定試験」の系適相当試験において、加工用 2 系統、でん粉原料用 2 系統について適応性を検討した。

2. 農業システムグループ

〔栽培システム・スマート農業研究関連〕

令和 7 年度は 7 課題を実施した。そのうち令和 7 年度が最終年度となる課題は 2 課題で、北海道農業試験会議に提案した課題は 1 課題である。

「複数畑作物のセンシングデータによる生育阻害要因判定手法の確立」では、生産技術 G と共同して、土壌 pH の差が生じやすい圃場の選別や圃場内の低 pH 領域を推定する手法を開発した。本課題で得られた成果は成績会議に提出し指導参考と判定された。

「かぼちゃピックアップ収穫機の活用による省力収穫体系の確立」では、安定した連続作業が出来なかったことから、研究期間を令和 7 年度まで延長して試験を実施したが茎葉が旺盛な条件での連続作業は困難であった。ただし、機械収穫で果実の腐敗が助長されないことや聞き取り調査で軽労化効果を確認した。

次年度も継続する 5 課題のうち、栽培システム関連は 2 課題、スマート農業技術関連が 3 課題である。

栽培システム関連で実施中の 2 課題のうち、「豆類育種試験におけるプロットコンバイン導入に関する効率化実証研究」では、豆類畑作 G と共同して、プロットコンバイン収穫の有用性実証試験を大豆・小豆・菜豆それぞれについて実施し、収穫損失や損傷粒の発生状況を確認した。また、プロットコンバインの導入により慣行の手刈り収穫から作業時間の大部分を占める

脱穀作業分が効率化できる可能性があることを確認した。

「ブロッコリー省力生産体系の構築に向けた機械一斉収穫技術の確立」では、適期培土が倒伏や曲がり株率を軽減する効果と、直播直後の灌水処理が出芽率を向上させる効果を確認した。また、ブロッコリー収穫機による収穫試験から、花蕾の軸を挟む下部搬送ベルト（下部ベルト）と花蕾を挟む挟持ベルト（上部ベルト）の速度比によって花蕾の損傷率が変動することを明らかにした。

スマート農業技術で実施中の 3 課題のうち、「秋まき小麦および大豆狭畦栽培の可変播種技術適用による生産安定化」では、過去の衛星データから保水性不良で秋まき小麦の栽植本数不足が懸念されると推定した地点は、当年においても起生期茎数や穂数が少なく収低収傾向であった。これら地点では、播種量の増加により生育初期の茎数が増加したことから可変播種の有効性が確認された。

「豆類主要病害虫に対する農薬散布用ドローンを用いた防除効果と散布特性の評価」では、生産技術 G と共同して、小豆および菜豆の主要病害虫を対象としたドローンによる防除試験と、農薬散布用ドローンの薬液散布特性評価試験を実施し、薬液濃度と防除効果、地上面に対し水平及び垂直方向の散布特性について評価した。

「農業機械稼働情報の取得による土壌硬度分布把握手法の確立」では、トラクタ内部の通信ラインに流れる各種信号を記録・解析し、土壌硬度との関係を検討した。エンジントルクやリアヒッチ引張力、燃料消費量に関する値が土壌硬度情報の抽出に有効であることを示した。

〔経営研究関連〕

令和 7 年度は 6 課題を実施した。

最終年度となる課題は 2 課題で、「組勘を活用した原価計算の簡便化と原価の推計手法の検討」では、暫定版の「原価計算ツール」を試作して作物別費用を計算し、既往のツールに対し 60%程度の作業時間削減効果を確認した。ただし、推計精度が目標値には達していないため、引き続き推計手法を検討して成果をとりまとめる予定である。

「複数年の営農データをもちいた情勢変化による経営収支の変化と酪農経営の事例分析」では、農協が所有する営農データを用いて、酪農情勢の変化が酪農経営の経営収支に与えた影響を階層別・経営体別に明ら

かにした。また、乳量の変化および飼料費の変化に着目し、特徴的な経営の情勢変化への対応と経営収支への影響には経営間差が存在することを示した。

次年度も継続する4課題のうち、「農業生産における温室効果ガス排出量の見える化と評価手法の確立」では、主管場である中央農試と協議して既往の推計マニュアルに改善を施すとともに、新たに試作した推計ツールをもちいて普及センターを対象とした試用評価をおこなった。温室効果ガスが見える化に有効であったが、評価結果をもとに次年度にむけた更なる改良点を整理した。

「地域分散型木質バイオマス熱利用に向けた農林連携モデルの提示」では、酪農地帯の飼料作における人材や余剰機械の把握と林業との連携の可能性を検証した。その結果、林業事業体では5～7月の作業が少なく冬季の作業面積が大きかった。一方、飼料作では夏季にトラクタやダンプの稼働時間が長く、冬季に短いことから農・林業間での人材や機械の連携の可能性が示唆された。

「畜舎特例法の活用による牛舎建築費用の低減効果と投資の経済性評価」では、畜舎特例法の申請資料を基に用途別、構造別の申請数を整理するとともに、構造の選択理由を聞き取りにより調査した。また、畜舎特例法では手続きの簡略化による認定期間の短縮効果が実感されていることを明らかにした。

「有機農業のGHG削減量見える化による購買意欲向上効果の解明」では、有機たまねぎ栽培面積が上位のオホーツク、上川の各4経営体を対象に作業体系の調査を実施し、GHG排出量を推計した。その結果、有機栽培による面積当たりGHG排出量は慣行栽培より減少する傾向が認められた。

3. 生産技術グループ

〔栽培環境研究関連〕

令和7年度の一般試験研究課題は10課題である。

新規課題は4課題で「畑作・露地園芸圃場におけるIoT機器とリモートセンシングを活用した灌水適期・適量通知システムと可変灌水技術の開発」（北見農試と共同）では、畑地灌漑施設が整備された畑作・露地園芸圃場を対象に、IoT機器対応の含水率計を用いた灌水適期とリモートセンシング技術を活用した可変灌水技術を検討した。

「2）気候変動による道内農業への影響予測および適応策（1）道内主要農作物への影響予測および適応策

⑤畑作」（中央農試他と共同）では、気候変動により早期播種・収穫延長が可能になることを想定し、播種時期と収穫時期が収量に及ぼす影響を検討した。

「衛星画像と地理情報システムを活用した畑作圃場における生産力広域診断技術の開発」では、衛星画像と地理情報システムから推定した腐植含量、熱水抽出性窒素含量、秋まき小麦の生育期節別の生育量などから圃場ごとの生産力を広域で診断可能であるかを検討した。

「排水不良マップと衛星画像を活用した可変施肥適否の自動判定手法の開発」では、秋まき小麦と大豆圃場を対象に既往の排水性不良の推定手法や可変施肥が有効に活用できる圃場の判別手法を検討した。

継続課題は「秋まき小麦および大豆狭畦栽培の可変播種技術適用による生産安定化」（農業システムG、中央農試と共同）の1課題である。

終了課題は5課題で「肥料価格高騰と養分収支を考慮した直播てんさいとたまねぎに対する適正施肥量の確立」（北見農試、花野菜センターと共同）では、直播てんさいおよびたまねぎにおけるリン酸減肥量を検討した。本課題で得られた成果について成績会議に提出し指導参考事項に判定された。

「肥料価格変動に応じたばれいしょ適正施肥量の設定」（上川農試と共同）では、加工用ばれいしょにおけるリン酸減肥量を検討した。本課題で得られた成果について成績会議に提出し指導参考事項に判定された。

「複数畑作物のセンシングデータによる生育阻害要因判定手法の確立」（農業システムG、中央農試と共同）では、複数畑作物の衛星リモートセンシングデータに基づく圃場内の生育阻害要因の判定手法を開発し、畑輪作体系の中に適用すべき生育改善策の決定手順を検討した。本課題で得られた成果について成績会議に提出し指導参考事項に判定された。

「脱炭素型農業実現のためのパイロット研究プロジェクト（3）1. 有機性資源の営農利用を促進する施肥等の資源代替技術の開発」では、消化液の土中への注入が可能なスラリーインジェクターの活用により、悪臭の原因となるアンモニア揮散の抑制と畑作物における土中施用時の窒素肥料換算係数および消化液のリン酸の肥料換算係数を検討した。また、「メタン発酵消化液を用いた「馬鈴しょ（澱粉原料用）」における栽培実証試験」では、でん粉原料用ばれいしょを対象に消化液を施用した場合の減肥可能性を検証した。

両課題で得られた成果について成績会議に提出し指導参考事項に判定された。

土壌調査・モニタリング関連課題は4課題である。

「農地土壌炭素貯留量等基礎調査事業（農地管理実態調査）」では、場内輪作体系において堆肥施用・残渣すき込みによる土壌炭素量等を測定した。

「国内資源の肥料利用拡大に向けた調査（地力調査）」では、士幌8地点、音更町12地点において農地および草地における地力の実態を調査した。「環境保全型有機質資源施用基準の設定調査」では、士幌8地点、音更町12地点において土壌理化学性の実態と変化を調査した。「農業農村整備事業に係る土壌調査」では、土地改良事業6地区（足寄町1、鹿追町1、上士幌町1、池田町1、更別村1、津別町1）で土壌調査を行った。

肥料および土壌改良剤では、てんさいを対象とした1資材の効果と実用性を検討した。

〔病虫研究関連〕

「発生予察調査」の定点圃場で発生量の多かった病害虫は、秋まき小麦の赤かび病、てんさいの褐斑病、てんさいのテンサイトビハムシおよびヨトウガであった。

新発生病害虫として道内では5病害13害虫が確認された。十勝農試が関係した新発生病害虫は、てんさいのシロイチモジヨトウ（新寄主）、ぶどうのキクピアオハムシ（新発生）およびとうきのヒメビロウドコガネであった。

「病害虫診断試験」では78件（病害55件、虫害6件、その他17件）の診断依頼に対応した。種ばれいしょ、菜豆およびながいもに関する診断依頼が多かった。

令和7度の一般試験研究課題は8課題である。

新規課題は2課題で「多発及び耐性菌に対応したテンサイ褐斑病の省力的防除技術の開発」（北見農試、中央農試と共同）では、テンサイ褐斑病を対象に、適切な散布終了時期、早期散布による防除効果を検討するとともに、マンゼブ剤以外の薬剤の防除効果をした。「気候変動に適応した道内産業と暮らしの構築Ⅰ－気候変動データベース構築と2050年以降の農林業等への影響予測および適応策－

2）気候変動による道内農業への影響予測および適応策（1）道内主要農作物への影響予測および適応策
⑤畑作（中央農試他と共同）では、高温による多発が特に懸念されるテンサイ褐斑病に対して適応策の検討を行った。

継続課題は、「安定的多収を目指した菜豆新品種の開発強化」（豆類畑作Gほかと共同）、豆類主要病害虫に対する農薬散布用ドローンをを用いた防除効果と散布特性の評価」（農業システムGと共同）、「ダイズシストセンチュウ抵抗性を有する小豆有望系統の育成強化」（豆類畑作Gほかと共同）、「気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第3期）2）（2）イ）秋まき小麦の赤かび病抵抗性」の4課題である。

終了課題は2課題で「「ジャガイモ黒あし病の種いも保菌に及ぼす地上部軟腐症状のリスク評価と対策」では、ばれいしょを対象に軟腐病の発病と黒あし病の塊茎内部保菌の関係を明らかにするとともに軟腐病の防除による保菌低減効果を検討した。本課題で得られた成果について成績会議に提出し指導参考事項に判定された。「はくさいとスイートコーンにおけるマキバカスミカメの防除対策の確立」は、はくさいとスイートコーンを対象にマキバカスミカメの防除技術を検討したが、技術提案のために年次間差を踏まえた散布回数を検討する必要があることから、試験を継続し令和8年度の成績会議に提出予定である。

「農薬の実用化試験」では9作物の19点（うち、マイナー作物農薬登録試験2点）について防除効果と実用性の評価を行った。過年度を含めて十勝農試が試験を実施した殺菌剤6点、殺虫剤8点は成績会議で実用性があると判定され指導参考事項となった。

〔園芸研究関連〕

令和7年度の一般試験研究課題は3課題である。

新規課題は2課題で「高温期の作型におけるにんじん、だいこんの品種特性」（花野菜セと共同）では、青果用だいこんを対象に、主に軟腐病や生理障害の発生に着目して、高温期の作型における品種特性を検討した。「ながいも」と「とかち太郎」の基本種維持事業」では、十勝農試ら四者が共同育成したながいも品種「とかち太郎」について、いも径が太く多収であることなど形質を持った基本種を維持した。

継続課題は1課題で、「ブロッコリー省力生産体系の構築に向けた機械一斉収穫技術の確立」（農業システムGと共同）である。

〔地域支援関連〕

十勝管内の農業および関連産業が直面する課題に迅速かつ的確に対応するため、試験研究機関、普及組織および総合振興局が連携し地域農業を支援する十勝地

域農業技術支援会議に事務局として参画した。今年度の「地域農業関連要望課題」として 27 課題の要望があった。要望団体へは聞き取り調査等を行い、迅速な課題解決の推進を図った。

十勝地域農業技術支援会議の今年度のプロジェクト課題として、「ながいも「とから太郎」乾物率向上に向けた諸問題の確認」に取り組み、管内の J A からの聞き取り、場内圃場での栽培試験を行い、支援会議代表者会議へ報告した。試験成績は今後のながいも栽培講習会等で利用していく。

革新的技術の迅速な普及を図るための「十勝地域における手亡新品種「十育 A65 号」の実証栽培試験」では、管内主産地に 2 ヶ所の実規模栽培圃場を設置し、生育と収量の調査を行った。昨年産の生産物を用いて実需での製品試作試験を実施した。試験の結果をとりまとめて、実規模栽培圃場設置地域の J A と普及センターに報告した。

「大規模畑作を支える気候変動に対応した収量性と品質に優れる菜豆の品種開発」では「十育 E 14 号」について、生産者圃場で農業特性を評価した。

D 試験研究および地域支援活動の課題名

1. 豆類畑作グループ

〔大豆育種研究関連〕

1) 大豆新品種育成（大正2年～継続）

(1) 大豆品種開発事業Ⅲ（令和7～9年）

目的) やや早・中生の白目中大粒大豆、黒大豆および納豆用小粒大豆について、現行品種よりも多収でダイズシストセンチュウ抵抗性等の障害・病害虫抵抗性に優れ、実需の求める優れた加工適性を有する系統を育成し、優良品種決定調査に供試する有望系統を3系統育成する。また、開発した有望系統よりもさらに多収で障害・病害虫抵抗性および加工適性に優れる系統を育成するため、材料養成を進める。

2) 大豆優良品種決定調査（昭和29年～継続）

目的) 育成中の有望系統及び品種について、諸特性及び生産力を調査し、現地における適応性を明らかにして、優良品種決定の資料とする。

3) ゲノミック選抜を活用した新たな多収大豆品種開発手法（令和7～9年）

目的) 短期間で20%多収な大豆新品種を開発するため、収量予測に有用なSNPパネルを開発し、これを活用した収量性のゲノミック選抜手法を確立する。またゲノム情報と収量試験のデータから、子孫が多収となる両親の組合せを探索するプログラムを開発し、アプリケーション化して活用することで、交配を効率化させる。

4) 国内生産力の強化を図るための加工適性を有する極多収ダイズ系統および病害虫複合抵抗性のダイズ系統の開発（令和5～7年）

目的) 北海道品種の大豆生産安定性をさらに向上させるため、海外品種を母材に用いた交配後代から、ダイズシストセンチュウ(以下、SCN) レース3抵抗性を有し、栽植様式改良と組み合わせで収量が標準品種対比130%以上の系統を1以上開発する。また、SCN レース3、SCN レース1、ダイズわい化病、ダイズモザイク病のうち2つ以上に抵抗性を有し、収量が標準品種比110%程度の系統を1以上開発する。

5) 寒地向け高タンパク質育種素材の選抜と検証（令和5～9年）

目的) タンパク質含量と収量性の積である「タンパク質収量」の最大化を目指し、品種開発の母本として利用可能な育種素材を開発する。また、メタボローム解析等を用いた関与する代謝物質の推定とその定量方法を確立し、ゲノム解析による原因遺伝子の推定および高タンパク質系統を選抜可能なDNAマーカーの開発を目的とする。

6) 気候変動に対応する北海道向け多収大豆品種の開発（令和7～9年）

目的) 近年の気候変動に対応する大豆品種を開発するため、耐湿性に優れ道央地域で安定栽培が可能であり、豆腐加工適性に優れる「ユキホマレ」対比115%以上の中生多収品種候補系統を1以上選抜する。「ユキホマレ」よりも成熟期がやや遅く且つ成熟期の変動が小さく安定栽培が可能な「ユキホマレ」対比110%以上の多収系統を1以上選抜する。

〔小豆育種研究関連〕

1) 小豆品種開発事業Ⅲ（令和7～11年）

目的) 多収で外観品質および土壌病害抵抗性に優れる良食味大納言小豆品種、土壌病害抵抗性に優れ機械収穫適性を有する多収の普通小豆品種、ダイズシストセンチュウ抵抗性を有する小豆系統の育成を目指し、有望系統を育成する。さらに、多収で各種障害抵抗性に優れ省力栽培可能な特性を有する材料の養成を進める。

2) 省力・安定生産に向けた小豆新品種開発（令和7～9年）

目的) コンバイン収穫適性に優れ「エリモ167」等の普及品種より10%多収の小豆新品種を開発する。また省力化に対応した除草剤耐性およびコンバイン収穫時の損失低減に関連する難裂莢性について有望な育種素材を開発する。

3) 優決 小豆（昭和46年～継続）

目的) 小豆育成系統について現地における適応性を検定し(優決現地相当)、優良品種決定の資とする。

4) 道央地域で安定生産できる中晩生小豆品種の開発強化(令和5~7年)

目的) 茎疫病抵抗性に関係するDNAマーカーを開発し、有効性を検証し、抵抗性系統を効率的に選抜する。また、初期世代から道央地域の気象条件下で選抜を行い中晩生小豆品種の開発を強化する。

5) ダイズシストセンチュウ抵抗性を有する小豆有望系統の育成強化(令和6~8年)

目的) DNAマーカー選抜を活用した反復戻し交配と抵抗性検定により、「エリモ167」にSCN抵抗性を導入した十系系統を選抜する。SCN抵抗性反復戻し交配系統を活用した新規交配を行う。畑輪作におけるSCN抵抗性小豆の導入効果を検証する。

6) 障害抵抗性に優れる小豆品種の開発促進(令和7~9年)

目的) 落葉病抵抗性の初期世代の選抜と後期世代の検定、および茎疫病・萎凋病の後期世代の検定、開花着莢期低温抵抗性検定を行う。あわせて、初期世代集団では温室・暖地を用いた世代促進を行い、耐病性・低温抵抗性に優れる安定生産可能な小豆新品種開発を促進する。

7) 小豆の風味・加工適性向上のための育種選抜強化(令和7~9年)

目的) 小豆後期世代育成系統の食味官能評価、中後期世代からの簡易製餡による加工適性評価を実施するとともに、早い世代において少量サンプルで実施可能な機器分析等による食味評価法、食感評価法の確立を目指す。

8) 小豆ゲノム育種基盤の構築による除草剤耐性マーカーの開発(令和5~7年)

目的) 小豆のゲノム育種基盤を構築して、除草剤耐性マーカーを開発し、除草剤耐性の選抜強化を図る。

9) 小豆の開花期高温抵抗性評価法の検討(令和6~7年)

目的) 落花・落莢に影響を及ぼす開花期高温抵抗性に関する評価法開発のための処理条件を明らかにする。

10) AI画像解析によるアズキのフェノタイプング技術の確立と葉の形態に関与する遺伝子領域の特定(令和7年)

目的) 小豆の受光体勢改良を目標として、小豆群落内の光合成能を維持あるいは高める可能性がある小豆の葉形態に着目し、AI画像認識技術を用いて表現型値を算出し、葉形態に関与する遺伝子領域を特定する。

〔菜豆育種研究関連〕

1) 菜豆新品種育成試験(昭和29年~継続)

目的) 多収で加工適性に優れ、耐病性および機械作業適性に優れる菜豆品種を育成する。

2) 大規模畑作を支える気候変動に対応した収量性と品質に優れる菜豆の品種開発

(令和7~9年)

目的) 製品収量が「福白金時」に比べて20%以上増加した白金時新品種および「舞でぼう」、「秋晴れ」等に対して10%以上増加した手亡または金時の有望系統を開発する。また、高温耐性について、菜豆での検定法を確立し、育成系統の高温耐性を評価する。

3) 優決 菜豆(昭和47年~継続)

目的) 菜豆育成系統について現地における適応性を検定し(優決現地相当)、優良品種決定の資とする。

4) 耐病性に優れる菜豆品種の開発促進(令和7~9年)

目的) 黄化病抵抗性および炭そ病真性抵抗性の選抜および検定を実施し、耐病性に優れる系統を選抜する。また、世代促進を実施し、病害虫抵抗性に優れる菜豆新品種開発を促進する。

5) リモートセンシング型の収量評価および実需者型の加工適性評価を活用した金時系統の選抜強化(令和5~7年)

目的) 多数の育成材料から短時間で植生指数データを獲得し、多収性選抜への適用性を確認することで、迅速な多収品種開発の基盤をつくる。多様な加工形態における美味しい煮豆特性を明らかにし、有望系統の煮豆加工特性が実需者の評価を含めて早い世代から評価を行う。

6) ゲノム育種法を活用した多収およびダイズシストセンチュウ抵抗性金時の開発促進

(令和 5～7 年)

目的) 新たなゲノム育種法を導入することにより、多収系統の選抜、ダイズシストセンチュウ抵抗性領域の検出を行い、安定多収の金時品種の選抜強化を図る。

〔豆類栽培研究関連他〕

1) 豆類育成系統の普及見込み地帯における実規模試験栽培 (令和 7 年)

目的) 豆類有望系統について、実規模栽培での普及性を評価するため、普及が見込まれる地域の圃場で試験栽培を行い、生育特性・収量性等を明らかにする。

2) 作物モデルを用いた小豆および菜豆の作期推定 (令和 5～7 年)

目的) 小豆・菜豆の品種ごとに、播種期が生育に与える影響を解析し、栽培可能期間を推定するとともに、発育に関する作物モデルを作成する。これらを用いて、低温や霜を避けるための作期および秋まき小麦の前作となる作期を 1 km メッシュで示す。

3) 小豆・菜豆の革新的育種システム構築による新品種開発強化 (令和 3～5 年)

目的) 小豆・菜豆の新たな戻し交配・世代促進技術を確認し、耐暑性・耐冷性等の新たな環境適応性評価技術を確認し、加えて育種データベース構築と育種年限短縮・選抜効率化の実証を行う。このことにより、新たなニーズに対応する、環境適応性の高い新品種の早期開発を強化する。

4) 豆類育種試験におけるプロットコンバイン導入に関する効率化実証研究 (令和 5～9 年)

目的) プロットコンバインを利用した子実重・子実品質・作業時間等を従来の手刈り体系と比較することで、プロットコンバインの導入効果を明らかにする。

5) インゲンマメモザイクウイルス抵抗性を有する小豆および菜豆品種の開発促進

(令和 7～9 年)

目的) 小豆および菜豆において、BCMV 抵抗性遺伝子を有する系統 (小規模生産力検定予備試験供試系統) を選抜する。また、BCMV の病徴および宿主範囲の確認と抵抗性検定を実施する。

〔畑作研究関連〕

(てん菜に関する試験)

1) てん菜輸入品種検定試験 (令和 6～10 年)

(1) 生産力検定試験

目的) てん菜輸入品種について、十勝農試における生産力検定を行い (優決基本相当)、優良品種決定の資料とする。

(2) 褐斑病抵抗性検定試験

目的) 有望な輸入品種について、褐斑病抵抗性を検定し、優良品種決定の資料とする。

(3) 根腐病抵抗性検定試験

目的) 有望な輸入品種について、根腐病抵抗性を検定し、優良品種決定の資料とする。

2) 直播栽培に適した病害抵抗性と収量特性を示すテンサイ品種候補の開発 (令和 6～7 年)

目的) 北海道内各地において、既存の優良品種の直播収量性を評価するとともに、直播および移植栽培での地上部生育差と収量差の関連性を検証する。

(麦類に関する試験)

3) 畑作物の地域適応性検定試験 (秋まき小麦)

(昭和 29 年～継続)

目的) 秋まき小麦の有望系統について、十勝農試および十勝管内における生産力等を検定し (優決基本・現地相当)、優良品種決定の資料とする。

4) 優決 麦類 (秋まき小麦) (昭和 33 年～継続)

目的) 秋まき小麦の育成系統について、十勝管内における適応性を検定し (優決現地相当)、優良品種決定のための資料とする。

5) 畑作物の地域適応性検定試験 (春まき小麦)

(昭和 29 年～継続)

目的) 春まき小麦の有望系統について、十勝農試における生産力等を検定し (優決基本相当)、優良品種決定の資料とする。

6) 春まき小麦の品種選定試験 (令和 3～7 年)

目的) 春まき小麦のホクレン育成系統について、十勝農試における生産力等を検定し (優決基本相当)、優良品種決定の資料とする。

7) 気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進 (第 4 期) (令和 7～9 年)

2) 地域の生産および品質安定に向けた障害・病害抵抗性と収量性の選抜強化

(2)雨害耐性および茎葉病害抵抗性の選抜強化 ①穂発芽性の選抜と検定強化（穂発芽特検・秋まき小麦）
目的）育成系統の穂発芽性を検定し、新品種育成の資料とする。

(6)地域の気象条件に対応した系統の選抜強化 ③十勝地域への適応性の評価（秋まき小麦 系適相当）
目的）系適世代の育成系統の生産力等を検定し、有望系統選抜の資料とする。

（新優良品種普及促進事業）

8）麦類新優良品種普及促進事業

（昭和 41 年～継続）

目的）優良品種候補とみなされる有望系統について、新品種決定と同時に種子供給できるよう増殖を行う。

（馬鈴しょに関する試験）

9）畑作物の地域適応性検定試験（馬鈴しょ）

（平成 13 年～継続）

目的）馬鈴しょの有望系統について、十勝農試における生産力等を検定し（優決基本相当）、優良品種決定の資料にする。

10）馬鈴しょ輸入品種等選定試験

（令和 3～7 年）

(1)生産力検定試験

目的）馬鈴しょ輸入品種等について、十勝農試における適応性を検定し（優決基本相当）、優良品種決定のための資料とする。

(2)現地試験

目的）馬鈴しょ輸入品種等について、十勝管内における適応性を検定し（優決現地相当）、優良品種決定のための資料とする。

11）優決 馬鈴しょ（昭和 50 年～継続）

目的）馬鈴しょ育成系統について、十勝管内における適応性を検定し（優決現地相当）、優良品種決定のための資料とする。

12）長期貯蔵性に優れ安定生産可能なポテトチップス加工用馬鈴しょ品種の開発（令和 7～9 年）

(2)ポテトチップス加工用有望系統の十勝地域における栽培適性評価（優決基本・系適相当）

目的）有望系統の十勝地域における地域適応性を評価する。

(4)気象・栽培条件が貯蔵性に及ぼす影響の評価

目的）産地が異なる塊茎の休眠期間の差異と要因を明らかにする。

（新農業資材の実用化試験）

13）除草剤及び生育調節剤（昭和 31 年～継続）

目的）畑作物に対する各種除草剤及び生育調節剤の実用性を検討する。

2．農業システムグループ

〔栽培システム・スマート農業研究関連〕

1）豆類育種試験におけるプロットコンバイン

導入に関する効率化実証研究（令和 5～9 年）

目的）豆類畑作グループの項に記載

2）かぼちゃピックアップ収穫機の活用による省力収穫体系の確立（令和 5～7 年）

目的）かぼちゃピックアップ収穫機による拾い上げ性能と、効率的な収穫のための前処理要件を解明し、作業時間を 20%程度削減した省力収穫体系を確立する。

3）ブロッコリー省力生産体系の構築に向けた機械一斉収穫技術の確立（令和 6～8 年）

目的）ブロッコリーの機械一斉収穫への適応性を高める直立性および斉一性向上を目指した栽培技術の開発と、花蕾損傷率を低減するための収穫機の改良を行い、花蕾径 10～18cm かつ無傷の歩留を現状の 50%から 80%に向上する技術を確立する。現地実証による開発技術の有効性評価、および機械一斉収穫した花蕾の実需評価を行い、収穫機の円滑な導入を可能にし、道内ブロッコリー作付けの維持拡大に貢献する。

4）複数畑作物のセンシングデータによる生育阻害要因判定手法の確立（令和 5～7 年）

目的）複数畑作物の衛星リモートセンシングデータに基づく圃場内の生育阻害要因の判定手法を開発し、畑輪作体系の中に適用すべき生育改善策の決定手順を提示する。

5）秋まき小麦および大豆狭畦栽培の可変播種技術適用による生産安定化（令和 6～8 年）

目的）秋まき小麦および大豆において衛星 NDVI 画像から栽植本数不足地点の抽出手法を開発するとともに、可変播種技術を開発し、抽出した地点における収量改善効果を検証する。

6) 豆類主要病害虫に対する農薬散布用ドローンを用いた防除効果と散布特性の評価

(令和 6～8 年)

目的) 生産技術グループの項に記載

7) 農業機械稼働情報の取得による土壌硬度分布把握手法の確立 (令和 7～9 年)

目的) トラクタに装備されている ISOBUS を利用して、耕起碎土作業のような土壌に対する作業を実施する際の稼働情報を取得し、それらの情報から土壌硬度の分布を把握するアルゴリズムを開発する。

〔経営研究関連〕

1) 組勘を活用した原価計算の簡便化と原価の推計手法の検討 (令和 5～7 年)

目的) 更なるコスト低減の取組や作物ごとの収益性の改善に寄与するため、耕種経営を対象とした作物別の原価計算の簡便化と原価の推計手法の検討をおこなう。

2) 農業生産における温室効果ガス排出量の見える化と評価手法の確立 (令和 6～8 年)

目的) 主要な農作物（水稻、小麦、大豆、ばれいしょ、てんさい）と園芸作物（たまねぎ、スイートコーン、かぼちゃ、にんじん、施設栽培によるトマト等）について、普及・定着している栽培工程に着目して、温室効果ガス排出量を推計し、見える化する。また、実際の推計作業を進める工程で、作業手順や最新の原単位等を整理し、既存の温室効果ガス排出量の推計マニュアル（平成 25 年行政参考事項）を更新する。

3) 地域分散型木質バイオマス熱利用に向けた農林連携モデルの提示 (令和 6～8 年)

目的) 林業分野における林地残材の活用と、農業分野における通年雇用と機械の効率的運用を同時満たすモデルを模索する。道総研の担当として、飼料作の盛んな道東地域における林地残材の集荷可能性とサプライチェーンを探るとともに、農業分野の人材・余剰機械とのマッチングの可能性を検証する。

4) 複数年の営農データをもちいた情勢変化による経営収支の変化と酪農経営の事例分析 (令和 7 年)

目的) 農協が所有する営農データを用いて、酪農情勢

の変化が酪農経営の経営収支に与えた影響を階層別・経営体別に明らかにするとともに、特徴的な経営の情勢変化への対応と経営収支への影響を明らかにすることで今後の営農指導の参考となる情報を作成する。

5) 畜舎特例法の活用による牛舎建築費用の低減効果と投資の経済性評価 (令和 7～9 年)

目的) 本道における畜舎特例法の利用状況を整理するとともに、事例調査により牛舎の更新実態を把握し、実態に基づく試算から建築費用低減効果並びに投資の経済性を明らかにする。

6) 有機農業の GHG 削減量見える化による購買意欲向上効果の解明 (令和 7～9 年)

目的) 実際に推計した有機農産物の GHG 排出量、仮説的に設定した購買意欲の向上への貢献が期待できる追加的な説明情報を用いた選択実験により、有機農産物の購買意欲の向上に有効な情報を特定する。

3. 生産技術グループ

〔栽培環境研究関連〕

(施肥法改善・土壌管理改善)

1) 脱炭素型農業実現のためのパイロット研究プロジェクト (3) 1. 有機性資源の営農利用を促進する施肥等の資源代替技術の開発

(令和 3～7 年)

目的) 消化液の土中への注入が可能なスラリーインジェクターの活用により、悪臭の原因となるアンモニア揮散の抑制と畑作物の減化学肥料栽培が両立することを実証する。

2) 肥料価格変動に応じたばれいしょ適正施肥量の設定 (令和 5～7 年)

目的) 収益性確保の観点に基づき、ばれいしょのリン酸およびカリを対象にして、肥料価格を考慮した適正施肥量を明らかにする。

3) 複数畑作物のセンシングデータによる生育障害要因判定手法の確立 (令和 5～7 年)

目的) 農業システムグループの項に記載

4) 肥料価格高騰と養分収支を考慮した直播てんさいとたまねぎに対する適正施肥量の確立

(令和 6～7 年)

目的) 本道の主要作物であり、リン酸・カリの施肥量が比較的多い直播てんさいおよびたまねぎを対象に、肥料価格高騰を考慮し、養分収支に見合ったリン酸・カリの適正施肥量を確立する。

5) 秋まき小麦および大豆狭畦栽培の可変播種技術適用による生産安定化 (令和 6～8 年)

目的) 農業システムグループの項に記載

6) メタン発酵消化液を用いた「馬鈴しょ(澱粉原料用)」における栽培実証試験 (令和 7 年)

目的) 畑作圃場へ消化液を施用する際の要点、注意点を確認し、でん粉原料用ばれいしょにおける減肥可能量を検証する。

7) 排水不良マップと衛星画像を活用した可変施肥適否の自動判定手法の開発 (令和 7～8 年)

目的) 既往の排水性不良の推定手法や可変施肥が有効に活用できる圃場の判別手法を総合し、可変施肥適否を自動的に判定する手法を開発する。

8) 畑作・露地園芸圃場における IoT 機器とリモートセンシングを活用した灌水適期・適量通知システムと可変灌水技術の開発 (令和 7～9 年)

目的) 畑地灌漑施設が整備された畑作・露地園芸圃場を対象に、IoT 機器対応の含水率計を用いた灌水適期・適量通知システムと、リモートセンシング技術を活用した可変灌水技術を開発する。

9) 衛星画像と地理情報システムを活用した畑作圃場における生産力広域診断技術の開発 (令和 7～9 年)

目的) 衛星画像と地理情報システムから推定した腐植含量、熱水抽出性窒素含量、秋まき小麦の生育期節別の生育量などから圃場ごとの生産力を広域診断し、「土づくり」に向けた具体的な対策を提示できる技術を開発する。

10) 気候変動に適応した道内産業と暮らしの構築 I

ー気候変動データベース構築と 2050 年以降の農林業等への影響予測および適応策ー

2) 気候変動による道内農業への影響予測および適応策

(1) 道内主要農作物への影響予測および適応策 ⑤畑作(てんさい) (令和 7～11 年)

目的) 気候変動により早期播種・収穫延長が可能になることを想定し、播種時期と収穫時期が収量に及ぼす影響を明らかにする。

(土壌調査・モニタリング)

11) 農地土壌炭素貯留量等基礎調査事業(農地管理実態調査) (令和 6～8 年)

目的) 国際指針に準じた温室効果ガスの吸収量算定方式に基づく土壌データ収集のために、農耕地における土壌炭素の貯留量と営農管理による変動を明らかにする。

12) 国内資源の肥料利用拡大に向けた調査(地力調査) (令和 6～8 年)

目的) 北海道の農地及び草地における地力の実態を調査する。

13) 環境保全型有機質資源施用基準の設定調査(定点調査) (平成 10 年～継続)

目的) 道内の耕地土壌の理化学性の実態および経年的変化を明らかにする。

14) 農業農村整備事業に係る土壌調査

(昭和 47 年～継続)

目的) 道営土地改良事業調査地区等について、適切な土地及び土壌改良指針を提示するため、土壌調査を実施する。

(農作物生理障害診断試験)

15) 農作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験 (令和 2～6 年)

目的) 突発的に発生した農作物の生育異常や生育障害の診断を行い、その対策を検討する。

(新農業資材の実用化試験)

16) その他資材 (昭和 39 年～継続)

目的) 畑作物に対する肥料・培土などの新資材の効果と実用性を検討する。

〔病虫研究関連〕

(植物防疫事業)

1) 病害虫発生予察調査 (昭和 16 年～継続)

目的) 指定及び指定外病害虫について発生予察法の確

立を図るとともに、病害虫の発生情報を病害虫防除所に提供し、病害虫防除の適正化を図る。

（一般病害虫試験）

2）気象変動に対応した高品質で安定生産可能な道産小麦の開発促進（第3期）2）地域の生産および品質安定に向けた障害・病害抵抗性と収量性の選抜強化（2）雨害耐性および茎葉病害抵抗性の選抜強化②赤かび病抵抗性の選抜および検定強化 イ）秋まき小麦の赤かび病抵抗性

（令和4～6年）

目的）変動の大きい気象条件下でも道産小麦の安定生産を可能にするため、赤かび病抵抗性の検定を行い、抵抗性に優れる品種の開発を促進する。

3）ジャガイモ黒あし病の種いも保菌に及ぼす地上部軟腐症状のリスク評価と対策

（令和4～7年）

目的）ばれいしょ茎の軟腐症状に関わる病原細菌の種構成を明らかにするとともに、菌種による症状の違いの有無と、茎の発病による収穫塊茎の黒あし病菌保菌リスクを明らかにする。また薬剤の茎葉散布による保菌低減効果を検討し、新たな防除対策の構築を目指す。

4）はくさいとスイートコーンにおけるマキバカミカメの防除対策の確立（令和5～7年）

目的）はくさいとスイートコーンにおけるマキバカミカメの加害時期と防除適期の解明のため、周辺環境を含めた発生実態を明らかとし、効果的な薬剤の選定と合わせて、防除対策を確立する。

5）豆類主要病害虫に対する農薬散布用ドローンをを用いた防除効果と散布特性の評価

（令和6～8年）

目的）農薬散布用ドローンの薬剤散布特性を明らかにし、ブームスプレーヤなどによる地上散布と防除効果を比較し、評価する。

6）ダイズシストセンチュウ抵抗性を有する小豆有望系統の育成強化（令和6～8年）

目的）豆類畑作グループの項に記載

7）多発及び耐性菌に対応したテンサイ褐斑病の省力的防除技術の開発

（令和7～9年）

目的）適切な散布終了時期を検討、早期散布による防除効果を検討するとともに、新規薬剤の探索を含めた、マンゼブ剤以外の薬剤の防除効果を確認し、これらに基づいて、テンサイ褐斑病の多発条件下において、糖量への影響を最小限にした省力的な防除方法を提案する。

8）耐病性に優れる菜豆品種の開発促進（令和7～9年）

目的）豆類畑作グループの項に記載

9）気候変動に適応した道内産業と暮らしの構築Ⅰ

－気候変動データベース構築と2050年以降の農林業等への影響予測および適応策－

2）気候変動による道内農業への影響予測および適応策

（1）道内主要農作物への影響予測および適応策 ⑤畑作（てんさい）（令和7～11年）

目的）高温による多発が特に懸念されるテンサイ褐斑病に対して適応策を検討する。適応策の一つとして、農薬散布水量が防除効果に及ぼす影響を明らかにする。

（農作物病害虫診断試験）

10 作物病害虫生理障害診断・緊急対策試験

（令和2～6年）

目的）突発または新発生病害虫の診断を行う。重要な突発病害虫に対しては緊急の対策試験を実施し、対応策を生産現場に速やかに提供する。

（新農業資材の実用化試験）

11 殺菌剤・殺虫剤（昭和45年～継続）

目的）各種病害虫に対する新殺菌剤・殺虫剤の防除効果と実用性を検討する。

〔園芸研究関連〕

（野菜に関する試験）

1）ブロッコリー省力生産体系の構築に向けた機械一斉収穫技術の確立（令和6～8年）

目的）農業システムグループの項に記載

2）ながいも「とかち太郎」の基本種維持事業（令和7～11年）

目的) 十勝農試ら四者が共同育成したながいも品種「とかち太郎」について、いも径が太く多収であることなど形質を持った基本種を維持する。

〔地域支援関連〕

(革新的技術導入による地域支援)

1) 十勝地域における手亡新品種「十育 A65

号」の実証栽培試験 (令和 6～7 年)

目的) 革新的技術の迅速な普及を図るため現地実証試験を行い新技術の適合性を検証する。手亡新品種「舞てぼう (十育 A65 号)」の「雪手亡」に対しての優位性と実用性を実証することで、普及を促進する。さらに、実需による加工適性試験を行い、製品原料としての実用性を確認する。

2) 大規模畑作を支える気候変動に対応した収

量性と品質に優れる菜豆の品種開発 (令和 7～9 年)

目的) 菜豆 (手亡、金時、白金時) について、既存品種より 10% 多収で耐倒伏性を有する系統を選抜する。十育有望系統は普及見込み地帯での実規模栽培試験で普及性を明らかにするとともに、実需者による製品試作試験を行い実需者の視点から評価を行う。

(十勝地域農業技術支援会議プロジェクト)

3) ながいも「とかち太郎」乾物率向上に向け

た諸問題の確認 (令和 7 年)

目的) ながいも「とかち太郎」の乾物率向上を目指し、生産現場の現状と生じている問題を把握し、必要な栽培技術を検討する。

E 試験研究成果の公表

1. 技術普及に移された成果

令和7年度北海道農業試験会議(成績会議)において、当年度とりまとめた試験成績について、普及、研究、行政に提供される事項が決定された。そのうち、当場が担当または分担した提出課題は次のとおりである(農業資材試験および農業機械の性能に関する研究課題を除く)。

1) 普及奨励事項

- (1) 小麦新品種候補「HW10号」(豆類畑作グループ)
- (2) ばれいしょ新品種候補「北育33号」(豆類畑作グループ)
- (3) てんさい新品種候補「HT55」(豆類畑作グループ)
- (4) てんさい新品種候補「KWS 3K503」(豆類畑作グループ)

2) 普及推進事項

該当なし

3) 指導参考事項

- (1) ばれいしょ地域在来品種「CP15」(豆類畑作グループ)
- (2) ばれいしょ地域在来品種「CP15」(豆類畑作グループ)
- (3) ばれいしょ地域在来品種「しんせい」(豆類畑作グループ)

グループ)

- (4) 養分収支と肥料価格を考慮した直播てんさいに対するリン酸減肥指針(生産技術グループ)
- (5) 養分収支と肥料価格を考慮した加工用ばれいしょに対するリン酸減肥指針(生産技術グループ)
- (6) スラリーインジェクターを活用したメタン発酵消化液の土中施用法と畑地における窒素とリン酸の肥効(生産技術グループ)
- (7) ジャガイモ黒あし病菌の塊茎内部保菌に対する茎葉の軟腐病の影響と防除効果(生産技術グループ)
- (8) 衛生画像を用いた圃場内低pH領域の推定手法(農業システムグループ)
- (9) かぼちの直播・密植・無整枝による省力多収栽培と長期安定出荷技術(生産技術グループ)
- (10) 令和7年度の発生にかんがみ注意すべき病害虫(生産技術グループ)
- (11) 移植時処理薬剤を用いたテンサイ褐斑病の省力防除技術(生産技術グループ)

4) 研究参考事項

該当なし

5) 行政参考事項

該当なし

2. 論文、資料および刊行物

1) 研究論文

論文名	学会誌名	巻号	掲載頁	著者(当該担当者には下線)
飼料基盤が酪農経営における搾乳牛舎投資の経済性に及ぼす影響ー北海道におけるフリーストール・搾乳ロボット導入経営を対象としてー	フロンティア農業経済研究	26-1・2	46-54	濱村寿史、 <u>後藤寛満</u>
コンベヤキャリアによる露地野菜収穫の省力化	北農	93-1	24-28	<u>原 圭祐</u> 、田縁勝洋
北海道におけるスイートコーンの褐色腐敗病の防除対策	農業試験場集報	110	57-63	小澤徹、 <u>相馬潤</u>

2) 学会講演および口頭研究発表（ポスター発表を含む）

発表名	発表学会等	開催地	開催日	発表者（会場担当者には下線）
北海道の豆類育種における収量性向上を目指したプロットコンバイン導入の試み	第7回小豆試験研究情報交換会	札幌市	R7. 9. 2	<u>来嶋正朋</u>
インゲンマメモザイクウイルス抵抗性を有する小豆および菜豆品種の開発促進	第7回小豆試験研究情報交換会	札幌市	R7. 9. 2	<u>島田翔太</u>
メタン発酵消化液の施用位置が畑作物の窒素およびリン酸の肥効に与える影響	農業農村工学会大会	群馬県	R7. 9. 2-9. 4	石倉究、池本秀樹、坂本樹一郎、櫻井道彦
高温が北海道産ダイズ子実のショ糖含量に及ぼす影響と今後の育種展望	日本育種学会第148回講演会	札幌市	R7. 9. 10-9. 11	<u>五十嵐秀成</u> 、高橋 春南、細川優介、川原 美香、小谷野茂和、中道浩司、小林聡、山口直矢
酪農経営における経営規模と常勤従業員の職務内容および職務満足の関係	令和7年度日本農業経営学会研究大会	帯広市	R7. 9. 12-9. 14	後藤寛満、金子剛、小泉真木、濱村寿史、米見理
北海道十勝地域における陸稲栽培の適正品種と窒素施肥量の解明	日本土壌肥科学会	新潟県	R7. 9. 17-9. 19	<u>池本秀樹</u> 、坂本樹一郎、石倉究
畑作物に対するメタン発酵消化液のリン酸肥効	日本土壌肥科学会	新潟県	R7. 9. 17-9. 19	石倉究、池本秀樹、坂本樹一郎、櫻井道彦
直播テンサイに対するプラスチックを用いない肥効調節型肥料の施用効果	日本土壌肥科学会	新潟県	R7. 9. 17-9. 19	坂本樹一郎、池本秀樹、石倉究
秋まきコムギにおいてコムギ萎縮ウイルスが検出される葉位と時期	日本植物病理学会北海道部会	札幌市	R7. 10. 10	東岱孝司、来嶋正朋、齊藤克史、其田達也
温暖化が北海道産ダイズ子実のショ糖含量に及ぼす影響	第43回種子生理生化学研究会	富山市	R7. 11. 27-11. 28	<u>五十嵐秀成</u> 、高橋 春南、細川優介、川原 美香、小谷野茂和、中道浩司、小林聡、山口直矢
圃場内の土壌物理性の違いが畑地灌漑の効果に及ぼす影響	日本土壌肥科学会北海道支部会	札幌市	R7. 12. 3	<u>池本秀樹</u> 、坂本樹一郎、石倉究
加工用パレイショにおけるリン酸減肥可能量の検討	土壌肥科学会北海道支部 2025年度秋季支部大会	札幌市	R7. 12. 3	坂本樹一郎、熊谷太司、中村隆一、唐星児、石倉究、池本秀樹
直播テンサイのリン酸収支と適正施肥量	日本土壌肥科学会北海道支部秋季大会	札幌市	R7. 12. 3	石倉究、池本秀樹、桑原萌、板垣英祐
北海道における温暖化とダイズの生育・収量・内部品質	令和7年度日本育種学会・日本作物学会北海道談話会講演会	オンライン	R7. 12. 6	足利奈奈、 <u>五十嵐秀成</u> 、萩原誠司、鈴木千賀、鴻坂扶美子
クミカンデータを用いた酪農経営における情勢変動と影響の分析	北海道農業研究会酪農部会	札幌市	R8. 2. 14	後藤寛満
テンサイ褐斑病抵抗性極強品種におけるテンサイ褐斑病の省力防除	第79回北日本病害虫研究発表会	盛岡市	R8. 2. 18-2. 19	東岱孝司、野津あゆみ、森万菜実
High-Yield Soybean Lines Derived from Recurrent Selection Using Genic Male Sterility and Honeybees in Hokkaido, Japan	国際シンポジウム「Advancing Soybean Breeding: Genetics, Genomics, and Biotechnology」	東京都	R8. 2. 25	<u>五十嵐秀成</u> 、加賀秋人、丸田泰史、山口直矢
Optimization of Crossing Strategies Considering Multiple Traits Based on Lookahead Simulation in a High-Speed Breeding Simulator	国際シンポジウム「Advancing Soybean Breeding: Genetics, Genomics, and Biotechnology」	東京都	R8. 2. 25	櫻井建吾、稲森稔、岡部黎、 <u>五十嵐秀成</u> 、山口直矢、加賀秋人、岩田洋佳
スラリーインジェクターを活用したメタン発酵消化液の土中施用法	十勝農業機械化懇話会	帯広市	R8. 3. 13	<u>石倉究</u>
外部環境の変化が酪農経営の経営間差に与える影響ー草地形酪農地帯におけるクミカン分析からのアプローチー	北海道農業経済学会143回例会	札幌市	R8. 3. 14	後藤寛満、 <u>蜂屋瑞貴</u>
酪農危機下の経営行動の違いによる飼料費・乳量・所得の変化	北海道農業経済学会例会	札幌市	R8. 3. 14	<u>蜂屋瑞貴</u> 、後藤寛満
高速育種シミュレーターでの先読みに基づく多形質を考慮した交配戦略の最適化	日本育種学会 第149回講演会	茨城県	R8. 3. 21-3. 22	櫻井建吾、稲森稔、岡部黎、 <u>五十嵐秀成</u> 、山口直矢、加賀秋人、岩田洋佳
コムギ条斑病に対する殺菌剤種子塗抹の防除効果	日本植物病理学会大会	枚方市	R8. 3. 26-3. 28	<u>東岱孝司</u>

3) 専門雑誌記事

タイトル	掲載誌名	号数	掲載頁	著者
露地野菜のコンベヤキャリア式収穫体系	ニューカントリー	4月号	20-22	原 圭祐
テンサイ褐斑病抵抗性極強品種における褐斑病の省力防除法	ニューカントリー	8月号	68-69	東岱孝司
衛星画像を用いた秋まき小麦の起生期茎数と止葉期窒素吸収量の推定による適正施肥	作物生産と土づくり	8・9月号	1-5	石倉究
被覆肥料の代替資材活用でプラスチック使用量を低減	ニューカントリー	9月号	62-63	坂本樹一郎
投資額を抑えつつ作業性を改善する畜舎リノベーション事例の紹介	畜産コンサルタント	2月号	46-50	後藤寛満

4) 著編書・資料

タイトル	書誌名	発行所	掲載頁	著者（当該担当者には下線）
北海道病害虫防除提要 第8版（畑作、野菜、有害動物）	北海道病害虫防除提要 第8版	北海道植物防疫協会	1-943	<u>東岱孝司</u>
北海道病害虫防除提要 第8版（畑作、野菜）	北海道病害虫防除提要 第8版	北海道植物防疫協会	1-943	<u>白井佳代</u>
北海道病害虫防除提要 第8版（水稻、畑作、野菜、飼料作物）	北海道病害虫防除提要 第8版	北海道植物防疫協会	1-943	<u>村田暢明</u>
北海道病害虫防除提要 第8版（害虫）	北海道病害虫防除提要 第8版	北海道植物防疫協会	1-943	<u>丸山麻理弥</u>

5) 新聞記事

タイトル	新聞名	掲載日	著者
コンベヤキャリアで露地野菜の収穫省力化	農業共済新聞	R7. 8. 27	原 圭祐
テンサイ 褐斑病抵抗性極強品種における褐斑病の省力防除法	農業共済新聞	R7. 9. 10	東岱孝司
令和7年の雪腐病の発生状況と今冬の薬剤防除	日本農業新聞	R7. 11. 6	東岱孝司

6) 刊行印刷物

タイトル	部数等	頁数	発行年月
令和8年 十勝圏農業新技術セミナー ―畑作・野菜―（要旨集）	300	18	R8. 2

F 研修および技術支援

1. 研修生の受入れ

1) 普及指導員研修

名 称	関係機関・対象者	実施期間	担当グループ
令和7年度普及指導員研修（新任者早期養成研修 新任者研修Ⅱ（前期）土壌肥料・植物保護・経営・労働）	普及指導員22名	R7.9.8～12 （農業大学校）	生産技術G
令和7年度普及指導員研修（スペシャリスト強化研修（畑作・前期））	普及指導員7名	R7.6.25～27	研究部長、各G、技術普及室
令和7年度普及指導員研修（スペシャリスト強化研修（経営・労働））	普及指導員11名	R7.10.21～23 （農業大学校）	農業システムG
令和7年度普及指導員指導力養成研修（高度専門技術研修（畑作・中期））	普及指導員3名	R7.9.2～4	研究部長、各G 技術普及室
令和7年度普及指導員指導力養成研修（高度専門技術研修（経営・労働）・後期）	普及指導員2名	R7.11.5～7	農業システムG
令和7年度普及指導員指導力養成研修（高度専門技術研修（乳牛・飼料作物））	普及指導員2名	R7.7.14～18	農業システムG
令和7年度普及指導員研修（スペシャリスト強化研修（乳牛・飼料作物））	普及指導員5名	R7.9.2～5	農業システムG
令和7年度普及指導員普及奨励新技術研修（畑作・園芸部門） ※振興局主催	参加者68名（うち普及指導員60名）	R8.2.5	各G、技術普及室

2) 国際協力事業等への協力

なし

3) その他

なし

2. 技術支援

1) 技術相談

電話、メール、訪問等による技術的な質問に対して回答を行い、延べ119件の案件に対応した。

2) 技術指導

病虫害等の診断依頼、調査手法の指導依頼に対応し、延べ51件の案件に対応した。主な依頼者は、農業改良普及センター、農業協同組合、民間企業、一般農業生産者である。

3) 講師派遣

講義内容	依頼者	実施月日	対応者
第1回業務評価委員会(豆類)	北海道農産基金協会	5月20日	安岡眞二
農業経営者育成研修	北海道農業大学校	5月29日	石倉究
令和7年度 第一回北海道農産協会技術専門部会の出席	北海道農産協会	6月5日	来嶋正朋
圃場毎の排水不良域の推定方法	JAとかち農技協	6月5日	石倉究
豆類安定生産に向けた播種時期	JAとかち農技協	6月5日	田澤暁子
令和7年度 第一回北海道農産協会技術専門部会の出席	北海道農産協会	6月5日	東岱孝司
てん菜輸入品種検定試験並びに品種連絡試験の現地調査	北海道農産協会	6月25日	来嶋正朋、青山聡
畑地かんがい試験研究会	北海道農政部	7月10日	石倉究
令和7年度営農企画・経営相談担当者会議	十勝農業協同組合連合会	7月16日	蜂屋瑞貴
国産・道産大豆の生産概要と大豆の育種動向	北海道味噌醤油技術会	7月18日	鈴木千賀
十勝バイオガス関連事業推進協議会幹事会	十勝バイオガス関連事業推進協議会	8月8日	石倉究
てん菜輸入品種検定試験の褐斑病特性検定	北海道農産協会	8月19日	来嶋正朋、青山聡
福島県農業総合センター技術移転セミナー	福島県農業総合センター浜地域農業再生研究センター	8月20日	石倉究
本別町土づくりを考える会	本別町土づくりを考える会	8月21日	石倉究
十勝農協連「経営管理支援システム」の活用支援	十勝農業協同組合連合会	8月27日	渡辺康平、蜂屋瑞貴
麦類雪腐病、畑作線虫病、コムギ条斑病	日本植物防疫協会	8月28日	東岱孝司
十勝農協連「経営管理支援システム」の活用支援	十勝農業協同組合連合会	9月5日	渡辺康平、蜂屋瑞貴
てん菜輸入品種検定試験並びに品種連絡試験の現地調査	北海道農産協会	9月10日	来嶋正朋、青山聡
十勝農協連「経営管理支援システム」の活用支援	十勝農業協同組合連合会	9月26日	渡辺康平、蜂屋瑞貴
第2回業務評価委員会(豆類)	北海道農産基金協会	10月8日	安岡眞二
畑作物に対する可変施肥およびセクションコントロール	北海道中小企業同友会とかち支部	10月20日	木村智之
農業経営部会10月例会(農業新技術・新作物グループ)、	北海道中小企業家同友会とかち支部	10月20日	石倉究
大規模野菜生産における省力化技術の現状と課題	スクラム十勝	10月29日	吉田邦彦
十勝農協連「経営管理支援システム」の活用支援	十勝農業改良普及センター東部支所	10月30日	渡辺康平、大畑美結
支援要請課題「農業者の現有資産を前提とした、経営規模拡大可能性の評価」	檜山農業改良普及センター	11月7日	渡辺康平
フォレージテストミーティング第62回会議	フォレージテストミーティング	11月21日	後藤寛満
北海道におけるスマート農業の現状と課題	拓殖大学北海道短期大学	12月3日	原 圭祐
白金時の新品種開発について	JAうらほろ	12月16日	佐藤博一
ビーンズ倶楽部勉強会	㈱山本忠信商店	12月18日	堀内優貴

(続き)

講義内容	依頼者	実施月日	対応者
釧路地区酪農専門技術員協議会委員会	釧路農業協同組合連合会	1月9日	後藤寛満、蜂屋瑞貴
「青色申告決算書に基づく十勝農業の所得解析」報告会	全十勝地区農民連盟	1月14日	蜂屋瑞貴、渡辺康平
圃場の化学性管理方法、改良の実践について	JA幕別町	1月14日	坂本樹一朗
令和7年度 第二回北海道農産協会技術専門部会の出席	北海道農産協会	1月22日	東岱孝司
総合的病害虫管理 (IPM)	帯広畜産大学	1月23日	東岱孝司
道南4地区てん菜作り研修会	道南地区てん菜振興協議会	1月29日	石倉究
北海道あずきフォーラム	北海道あずきフォーラム事務局	2月5日	堀内優貴
農業技術伝達研修	十勝総合振興局	2月5日	東岱孝司
十勝地域農業者合同研修会	帯広市	2月5日	池本秀樹
直播てんさい・ばれいしょに対するリン酸減肥指針	後志総合振興局	2月19日	坂本樹一朗
長いも技術講習会	忠類農業協同組合長いも部会	2月24日	鳥越昌隆
十勝農協連「経営管理支援システム」「農産物生産費集計システム」の活用支援	十勝農業改良普及センター東部支所	2月26日	渡辺康平、大畑美結
令和8年(令和7年度)豆作り講習会	日本豆類協会	2月27日	東岱孝司、佐藤博一
豆作り講習会	日本豆類協会	2月27日	東岱孝司
長いも技術講習会	帯広市川西長いも生産組合	2月27日	鳥越昌隆
釧路地区営農担当部課長会議	釧路農業協同組合連合会	3月4日	後藤寛満、蜂屋瑞貴
JA十勝池田町春季畑作研修会	JA十勝池田町	3月5日	佐藤博一
長いも技術講習会	十勝中央青果団地運営協議会	3月5日	鳥越昌隆
衛星データを利用した低pH領域の判定法	農研機構	3月6日	吉田邦彦
第3回業務評価委員会(豆類)	北海道農産基金協会	3月10日	安岡眞二
コンベヤキャリアによる露地野菜の収穫作業省力化	ホクレン	3月10日	原 圭祐
十勝農協連「経営管理支援システム」「農産物生産費集計システム」の活用支援	十勝農業改良普及センター東部支所	3月18日	渡辺康平

3. 参観・視察者対応

1) 参観・視察者

訪問団体等	人数	訪問日	対応グループ
下居辺地区運営協力委員会畑作部会	20	R7. 6. 9	豆類畑作G
幕別町しらかば大学	24	R7. 6. 9	研究部長
(株) 丸勝	3	R7. 6. 10	豆類畑作G
小清水町大豆採種組合 (JAこしみず)	6	R7. 6. 17	豆類畑作G
十勝AEC東部支所、農野牛地域農業者	7	R7. 6. 20	生産技術G
十勝中部地区指導農業者・農業士会	15	R7. 6. 26	豆類畑作G
大和雑穀株式会社	7	R7. 6. 27	豆類畑作G
JA十勝清水町青年部	10	R7. 7. 1	農業システムG
帯広大正農業協同組合	8	R7. 7. 3	豆類畑作G
(株) 北海道グレインカンパニー	2	R7. 7. 4	豆類畑作G
JA中札内村青年部	24	R7. 7. 7	豆類畑作G
北海道澱粉工業会 研究開発委員会 原料対策部会	25	R7. 7. 11	豆類畑作G 生産技術G
株式会社愛農	25	R7. 7. 17	豆類畑作G
株式会社 御座候	4	R7. 7. 24	豆類畑作G
池田町農業構造政策推進協議会	25	R7. 8. 5	農業システムG
札内農協	6	R7. 8. 5	豆類畑作G
JA北ひびき幹事会	7	R7. 8. 7	研究部長
JAおとふけ (種子豆類生産者)	12	R7. 8. 7	豆類畑作G
十勝農業改良普及センター十勝東部支所	18	R7. 8. 22	農業システムG 生産技術G
網走農業改良普及センター清里支所	3	R7. 8. 26	生産技術G
大栄産業株式会社	2	R7. 8. 28	豆類畑作G
株式会社 虎屋 生産支援部研究所	3	R7. 9. 9	豆類畑作G
ホクレン農産部雑穀課	35	R7. 9. 10	豆類畑作G
株式会社 丸勝	3	R7. 9. 26	豆類畑作G
根室農業改良普及センター	4	R7. 10. 2	生産技術G
竹下大学 桐谷曜子	2	R7. 10. 30	豆類畑作G
千歳市農業委員会	13	R7. 11. 13	研究部長
十勝西区農事組合	15	R7. 12. 3	豆類畑作G
兵庫県立農林水産技術総合センター	1	R8. 3. 9	豆類畑作G
全国農業協同組合連合会青森県本部	10	R8. 3. 19	生産技術G

注) 「1. 研修生の受け入れ」に記載したものは除いた。

月	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	年計
団体数	0	7	7	7	3	2	1	1	0	0	2	30
人数	0	82	98	73	41	6	13	15	0	0	11	339(人)

G 広報活動、研究企画、場運営等

1. 広報活動

1) 令和7年度十勝農業試験場公開デー

本年度は開催しなかった。

2) 令和8年 十勝圏農業新技術セミナー

日 時：令和8年2月25日（水）11:30～16:00

場 所：幕別町百年記念ホール

主 催：十勝農試（共催：十勝農業改良普及センター、幕別町、後援：十勝農業協同組合連合会、北海道十勝総合振興局）

参加者：187名

内 容：

・新品種・新技術の紹介（口頭発表）

①病害虫に強くポテトチップスがきれいに揚がる！ばれいしょ新品種「北育33号」、②てんさい新品種「HT55」・「KWS 3K503」、③褐斑病”極強”で高糖分！てんさい新品種「KWS 3K503」、④年明けも道産かぼちゃを食卓に！おすすめ品種と省力栽培・貯蔵技術、⑤土壌の蓄積リンを積極活用！直播てんさいの新しいリン酸施肥、⑥土壌の蓄積リンを積極活用！加工用ばれいしょの新しいリン酸施肥、⑦令和8年に特に注意を要する病害虫

・ポスター発表

①土壌の蓄積リンを積極活用！春まき小麦の新しいリン酸施肥、②土壌の蓄積リンを積極活用！たまねぎの新しいリン酸施肥、③プラスチック被覆肥料に頼らない秋まき小麦への代替資材、④プラスチック被覆肥料に頼らない露地野菜への代替資材、⑤くさい物にはフタ！スラリーインジェクターも使って消化液の養分を畑でも活用、⑥根絶が難しいジャガイモ黒あし病への対応を考える ～軟腐病からの保菌と品種間差～、⑦農業法人の職場環境を改善！従業員が抱える課題と要望が見える化、⑧令和7年度に新たに発生した病害虫

3) フードバレーとかち推進協議会

本協議会は、「農林水産業」や「食」を柱とする地域産業政策「フードバレーとかち」を推進し、産業の振興を十勝全体で図ることを目的として、十勝管内の

農林水産業関係団体、商工業団体、大学試験研究機関、金融機関、行政団体を持って組織される。会場からは場長が協議会委員として参画している。

・令和7年4月28日に定期総会が書面開催され、令和8年度の事業計画、収支予算が承認された。

4) スクラム十勝

(1) 令和7年度第1回スクラム十勝戦略計画チーム会議

日 時：令和7年6月3日 10:30～11:30

場 所：Zoom 会議

内 容：①スクラム十勝の名簿について：人事異動により変更のあった箇所について確認した。②令和7年度スクラム十勝シンポジウムについて：令和7年度の担当機関である北海道農業研究センター芽室拠点から、シンポジウムの企画案が提示され検討が行われた。

(2) スクラム十勝シンポジウム 2025

日 時：令和7年10月29日 14:00～16:45

場 所：会場（とかちプラザ）およびオンライン（Zoom）によるハイブリッド開催

主 催：スクラム十勝（帯広畜産大学、北農研芽室拠点、畜試、十勝農試、とかち財団、家畜改良センター十勝牧場）

参加者：197名

内 容：「農業の省力化とスマート技術」をテーマとして、主催6機関がそれぞれ20分の講演を行った。会場からは農業システムGの坂口主査が「大規模野菜生産における省力化技術の現状と課題」とのタイトルで発表した。なお、本シンポジウムは、帯広市民大学講座としても開催し、同講座を聴講する一般市民も参加した。

5) ホームページの更新、技術情報の公開

十勝農試情報システム委員会が中心となり、ホームページの修正・更新などの運用管理および、場内 LAN の保守等を行った。また、例年どおり場主催行事開催案内および入札情報を随時掲載し、耕作期間中は定期作況報告を毎月更新した。

2. 研究企画・場運営

1) 諸会議

(1) 運営会議

場の管理運営に係る事項の協議を行う場として、協議案件により、運営会議（研究主幹以上）を開催した。開催月日は令和7年4月24日、5月22日、6月9日、7月24日、11月28日、令和8年2月12日、3月19日であった。

(2) 北海道農業試験会議に係る場内検討会

新規課題検討会議、成績会議および設計会議に提出する試験研究課題について、それぞれ6月23日、12月8～9日および2月6・9日に場内検討会を開催した。

(3) 現地委託試験検討会議

十勝管内現地委託試験に係る成績検討会議は令和7年11月26日に芽室町中央公民館で、設計検討会議は令和8年3月24日にオンライン（Zoom）で開催した。

2) 各種委員会

(1) 構成

委員会名	委員長	副委員長	事務局	委員
交通安全対策委員会	安全運転管理者 (総務課長)	副安全運転管理者 (研究部長)	主査(総務)	各研究主幹
業務委員会	研究部長	—	豆類畑作G 研究主幹 (大豆・支援)	安達祐平、萩原誠司、佐藤博一、来嶋正朋、吉田邦彦、坂本樹一朗、阿部純也、村田暢明
土地利用計画委員会	研究部長	総務課長	豆類畑作G 研究主幹 (大豆・支援)	各研究主幹（豆類畑作G〈大豆・支援〉を除く）、主査（総務、大豆、小豆菜豆、畑作、栽培システム、栽培環境、園芸、病虫）
図書委員会	研究部長	総務課長	生産技術G 研究主幹	主査(総務)、足利奈奈、堀内優貴、渡辺康平、白井佳代
情報システム委員会	研究部長	—	農業システムG 研究主幹	主査(総務)、三浦風香、五十嵐秀成、島田翔太、木村智之、坂本樹一朗
契約職員雇用委員会	総務課長	—	主査(総務)	各研究主幹
防災対策委員会	場長	研究部長	—	総務課長、主査(総務)、高橋英樹、豆類畑作G〈大豆・支援〉研究主幹
入札参加者指名選考委員会	場長	—	[書記] 主査(総務)	研究部長、総務課長、研究主幹（都度指名）
請負工事施工成績評価委員会	場長	—	—	研究部長、総務課長、研究主幹（都度指名）
施設管理委員会	研究部長	—	総務課長	主査(総務)、各研究主幹
安全衛生委員会	場長	—	[事務責任者] 総務課長	研究部長、猪股大翔、各研究主幹（衛生管理者含む）、労働組合支部長、同書記長

(2) 活動内容

ア. 土地利用計画委員会

令和8年1月9日および3月2日に委員会を開催し、令和8～9年度の輪作試験圃場の作付変更について検討した。A6北圃場のダイズシストセンチュウレース1特性検定中止が報告され、今後の取り扱いを検討した。また、防風林整備計画について、令和7年度実施状況が報告され、令和8～9年度計画を検討した。

イ. 契約職員等雇用委員会

令和8年2月26日に次年度雇用委員会を開催し、求人掲示（ハローワーク）と書類選考を経て、3月26日までに面接を実施した。令和8年度の場内契約職員等28名（事務補助、農作業補助、農業技能）の任用者を決定した。

ウ. 業務委員会

定期業務委員会を令和7年4月10日から10月16日まで、毎週木曜日16時から計29回開催し、次週の作業計画等を調整・決定した。

エ. 情報システム委員会

ホームページの修正・更新などの運用管理および、場内 LAN の保守等を行った。IT 資産管理システム・資産管理エージェントについては、①オフラインのパソコンからのデータ収集および本部報告（2 か月毎）と、②移動等に伴うハードウェア台帳の更新、③各職員パソコンのソフトウェアライセンス台帳登録を実施している。

オ. 図書委員会

農業システムグループから提案のあった酪農・乳牛業界誌の定期購読について、令和 7 年 7 月 24 日の第 3 回運営会議において各 G の負担額を提案し、承認を得

た。令和 8 年 1 月 22 日からは、メールにより次年度購入の和雑誌について協議し、1 月 28 日に図書委員会の結論として購読計画を決定した。

カ. 安全衛生委員会

場内安全衛生委員会を毎月 1 回開催（令和 7 年 4 月 16 日、5 月 22 日、6 月 19 日、7 月 29 日、8 月 21 日、9 月 17 日、10 月 22 日、11 月 28 日、12 月 18 日、令和 8 年 1 月 29 日、2 月 17 日、3 月 19 日）し、場内諸施設等の安全確認と灯油漏洩再発防止定期点検などを行った。

3) 職員研修

(1) 職員研修

受講者	研 修 課 題	研修場所	研修期間
蜂屋 瑞貴	新規採用職員研修A	道総研プラザ	R7. 4. 8～10
職員6名	道総研不正防止計画に基づくコンプライアンス研修	自習	R7. 5. 12～6. 3
職員2名	道総研不正防止計画に基づく研究倫理研修	e-ラーニング	R7. 5. 13～5. 23
蜂屋 瑞貴	農研本部新規採用研究職員研修	道総研プラザ	R7. 6. 3
池本 秀樹	研究課題立案研修	オンライン受講	R7. 9. 2～9. 3
蜂屋 瑞貴	新規採用職員研修B	オンライン受講	R7. 9. 26 R7. 11. 28 R7. 12. 19
蜂屋 瑞貴	新規採用職員研修C	林業試験場、林産試験場	R7. 10. 7～9
駒井 敦	ハラスメント相談員研修	道総研プラザ	R7. 10. 16
相馬 潤	女性活躍推進研修	道総研プラザ	R7. 11. 4
職員43名	e-ラーニング研修（コンプライアンス・ハラスメント他）	オンライン受講	R7. 4. 25～ R8. 3. 31

(2) 技術研修

受講者	研 修 課 題	研修場所	研修期間
猪股 大翔	安全衛生スタッフ向けリスクアセスメント実務研修	北海道安全衛生サービスセンター	R7. 7. 15
駒井 敦	職長等・安全衛生責任者安全衛生教育研修	労災防止センター	R7. 7. 15～ R7. 7. 16
駒井 敦	安全運転管理者等講習	幕別町百年記念ホール	R7. 8. 25
原 圭祐	乾燥設備作業主任者技能講習	北海道職業能力開発サービスセンター	R7. 11. 5～11. 6
原 圭祐	保護具着用管理責任者教育	オンライン受講	R8. 3. 18

4) 海外出張

出張者	出張課題（枠組）	出張先	出張期間
原 圭祐	土層改良および可変施肥に係わる中日技術交流会	中国黒竜江省	R7. 8. 3～8. 9

5) 表彰

該当なし

6) 職場研修

研修項目	実施日
契約職員採用時研修（就業規則、行動のルールとモラル、交通安全、農作業安全等）	R7. 5. 12
場内ほ場参観リハーサル	R7. 6. 11
職場研修（法令遵守等研修）	R7. 6. 18
交通安全研修	R7. 8. 18
消防訓練	R7. 12. 4
情報セキュリティ研修	R7. 6. 9～ R7. 6. 30
各種学会、研究会、シンポジウム等の講演リハーサル	随時実施
交通安全情報の周知（帯広警察署等からの情報を全職員に回覧）	148回

7) 安全衛生対策

開催内容	検討内容	実施日
第1回安全衛生委員会	熱中症・コロナ対策、職場巡視、機械警備関係、保護具の取扱い、作業安全注意喚起、意見交換など	R7. 4. 16
第2回安全衛生委員会		R7. 5. 22
第3回安全衛生委員会		R7. 6. 19
第4回安全衛生委員会		R7. 7. 29
第5回安全衛生委員会		R7. 8. 21
第6回安全衛生委員会		R7. 9. 17
第7回安全衛生委員会		R7. 10. 22
第8回安全衛生委員会		R7. 11. 28
第9回安全衛生委員会		R7. 12. 18
第10回安全衛生委員会		R8. 1. 29
第11回安全衛生委員会		R8. 2. 17
第12回安全衛生委員会		R8. 3. 19

3. 自己点検への対応

道総研集約 リストNo.	項 目	件数、人数等
1	研究成果発表会・企業向けセミナーの開催状況	1件、約200名
2	研究会等の開催状況	0件
3	展示会等への出展件数	0件
4	研究報告書の発行状況	0件
5	技術資料の発行状況	1件、300部
6	その他紙媒体発行状況	0件
7	普及組織との連絡会議等開催件数	5件、9回
8	企業等へ訪問し広報活動した件数	0件
9	行政や企業等で活用された成果の数	1件
12	研究成果発表会・企業向けセミナーによる公表件数	17件
13	研究会における公表件数	0件
14	学会誌等への投稿	21件
15	研究報告書での発表件数	1件
16	学会やシンポジウム等での発表件数	23件
17	電子媒体による公表件数	12件
19	学会役員・委員件数	-
20	技術相談の実施状況	146件
21	技術指導の実施状況	119件
22	講師等派遣の実施状況	51件
27	研修者の受入状況	10件、119名
28	連携協定先との事業の実施件数	3件
29	道関係部との連絡会議等の開催件数	15件、23回
30	市町村との意見交換等の開催	3件、7回
31	関係団体との意見交換等の開催	18件、28回
32	道民意見把握調査の回答数	1件
33	出前授業の実施件数	0件
37	国内研修Ⅱの派遣状況	24件、
38	道民向けイベントの開催状況	0件
39	国際協力事業等への協力状況	2件、34名
40	災害等に関係した技術指導	0件
42	ホームページ発信・更新件数	10件
46	職場研修	3件
47	安全衛生委員会等	12回
48	機器設備の点検状況：職場巡視による各調査室と農業機械庫等の点検	6回
49	その他の取り組み：敷地内ゴミ拾いと草刈りなどの環境整備	7回
50	グリーン購入の金額	4,976千円
51	視察・見学者の受入状況	29件、329名

注) 例年、実績のない項目は除いた。

令和7年度
十勝農業試験場年報

令和8年7月

地方独立行政法人北海道立総合研究機構
農業研究本部 十勝農業試験場 発行
〒082-0081 北海道河西郡芽室町新生南9線2番地

Tel 0155-62-2431

Fax 0155-62-0680

<https://www.hro.or.jp/agricultural/research/tokachi/index.html>
